

Annals of the Fukuyama City University Extension Center

ISSN 2186-8255

vol.7
2017

福山市立大学教育研究交流センター

年 報

Annals of the
FEC
Extension
Center
U

2017年度（平成29年度）教育研究交流センター年報の発刊にあたって

福山市立大学 教育研究交流センター長
渡邊 一成

本学の教育研究交流センターは、開学と同時にスタートを切って丸7年となりました。

今年度は、6大学連携の3年目となり、備後圏域にある6大学（尾道市立大学、県立広島大学、福山大学、福山平成大学、福山職業能力開発短期大学校、福山市立大学）が集まり、備後圏域の知のステップアップのために議論を続けています。昨年より開催している「特別企画 6大学エクステンション連携講座 びんご圏域6大学の人気講座紹介！！」では、大学が存しない笠岡市の笠岡市民会館にて講座を開催し、地元高校生も含め、多くの方々に参加いただきました。スタートを切った一昨年よりも、より緊密に議論を深め、引き続き、各大学等の公開講座の情報を一元化したチラシ作成等、備後地域にとって意味のある6大学連携をめざして進めております。

また、教育研究交流センター主催の公開講座は、大学が広く一般に知見を広める場でもあり、引き続き、当センターの重要な活動の場であり続けております。

今年度につきましては、視点を大学の重要な役割である「知の深化」という共通テーマで、全7回の公開講座を開催してまいりました。普段の生活では知ることのない、専門的で興味深いテーマを様々な側面から取り上げ、新たな世界の再発見につなげていただくことを目的として、様々なジャンルで活躍されている方を講師としてお招きしました。

共通テーマで実施する公開講座とは別に、国際交流としての講座や、特別講演会も大きな関心を寄せていただきました。本年度は、5月に格差社会における中国の“流動児童”の教育現状と課題に関する講演会を、そして9月にフィンランドのネウボラシステムについての講演会を、さらに11月には、大学間交流協定を締結しているアメリカ合衆国のアラスカ大学フェアバンクス校の教育活動に関する講演会を実施しました。

また、本学教員の専門分野を活かした、少人数で体験型のワークショップも6年目を迎え、多くの参加者に喜んでいただきました。そのほか、5回目となる「ふくやまサイエンスフェスティバル」は、福山の子どもたちにも人気が高い事業となってきました。

これら当センターの活動の成果を取りまとめ、年報として記録に残すことといたしました。これも学内外の多くの方の支援の賜物であり、改めて感謝申しあげる次第です。

来年度の取組内容も決まりつつあり、自信を持って新年度を迎えたいと思っています。

今後とも、皆様のご意見やご要望も踏まえながら、創意工夫を凝らして活動内容を充実させていく所存ですので、来年度以降も引き続きご協力いただきますようお願い申しあげ、発刊のご挨拶といたします。

目次

CONTENTS

教育研究交流センター年報の発刊にあたって

事業報告

1 事業実績	-----	1
2 特別講演会実施報告書	-----	3
3 公開講座実施報告書	-----	15
4 ふくやまサイエンスフェスティバル	-----	36
5 ワークショップ実施報告書	-----	43
6 高大連携実施報告書	-----	60
7 活動記録	-----	71

参考資料

福山市立大学教育研究交流センターの概要	-----	72
福山市立大学教育研究交流センター規程	-----	74

事業報告

■ 事業実績

(1)特別講演会

共通テーマで実施する公開講座とは別に、特別講演会も実施しました。
2017年度（平成29年度）は、次のとおり、外部講師を招き4回の特別講演会を実施しました。

テーマ	講 師		実施日時	実施場所	参加人数 (人)
びんご圏域6大学の人気講座紹介!! 第2弾	長崎 信浩 上別府 隆男	福山大学薬学部薬学科教授 福山市立大学都市経営学部教授	5月13日(土) 13:00～16:00	笠岡市民会館	40
国際交流 格差社会における中国の“流動児童”の教育 現状と課題 ― 北京の例を中心に ―	張 燕	元中国北京師範大学教育学部教授	5月19日(金) 10:40～12:10	本学 大講義室	121
フィンランドのネウボラシステムと日本版への学び	マリア・コッコ マルクス・コッコ 正保 正恵	フィンランド大使館報道・文化担当参事官 福山市立大学教育学部教授	9月16日(土) 13:30～15:30	本学 大講義室	121
アラスカの大自然で学ぶ	Michelle Bartlett Kim Aragon Stewart 福田 正己 澤田 結基	アラスカ大学フェアバンクス校 夏季プログラムディレクター アラスカ大学フェアバンクス校 外国語文学科講師 福山市立大学名誉教授 福山市立大学都市経営学部准教授	11月2日(木) 16:30～18:30	本学 中講義室A	45
			合 計	年間4回	327

(2)公開講座

福山市立大学では、広く知識や情報を市民の皆様に公開していくために、公開講座を実施しています。
開学6年目である2017年度（平成29年度）の公開講座の共通テーマは、「知の実践」でした。国内外で活躍されている方による「知」を知り地域活性化を目的とした講演を実施し、多くの方に聴講していただきました。

テーマ	講 師		実施日時	実施場所	参加人数 (人)
女性と政治：女性の参加で政治は変わる	相内 眞子	北翔大学前学長・名誉教授	6月17日(土) 14:00～15:30	本学 中講義室A	81
「赤ずきん」を読んで、文学の森で(迷子)になろう!!	岡光 一浩	山口大学名誉教授	7月15日(土) 14:00～15:30	本学 中講義室A	56
広島豪雨災害を踏まえた防災対応と福山市への知見	松田 智仁 渡邊 一成	日本都市計画学会中国四国支部広島豪 雨災害・防災まちづくり検証特別委員会 福山市立大学都市経営学部教授	8月6日(土) 14:00～15:30	本学 中講義室A	74
ブランドから組立てる地域戦略 ―消滅可能性都市とされた田舎町の挑戦―	力武 文雄	一般社団法人アンテナさくほ代表	10月7日(土) 14:00～15:30	本学 中講義室A	31
心と体の健康	加藤 由美子	作曲家 NHKテレビ体操・ラジオ体操 専属ピアニスト	10月21日(土) 14:00～15:30	本学 大講義室	95
古代の海民と北海道	瀬川 拓郎	旭川市博物館館長	11月18日(土) 14:00～15:30	本学 大講義室	49
冬の夜空の物語	香西 洋樹	鳥取市さじアストロパーク佐治天文台台長	12月16日(土) 14:00～15:30	本学 中講義室A	75
			合 計	年間7回	461

※公開講座は福山商工会議所が後援しています。

(3)ふくやまサイエンスフェスティバル

小学生を主な対象として、楽しみながら体験し学べる「2017ふくやまサイエンスフェスティバル」を開催しました。国内有数の実験名人を招き様々なサイエンスショーを行い、本学教員と小学校などの理科の先生、地元企業・団体が協力し、実験・展示ブースを設けました。また、科学実験のほかに地元企業企画として工作機械の実機体感運転やペットボトルをリサイクルしたプラスチック板を加工したり、ジャガイモの保存方法の違いでジャガイモの味の差を確認するなど各種プロゲ

行事名	講 師	実施日時	実施場所	来場者数 (人)
2017ふくやまサイエンスフェスティバル	本学教員や小学校教員，地元企業や外部講師ほか	9月30日(土) 10:00～15:00	本学中庭	1,100

(4)ワークショップ

本学教員が専門分野を活かし、一般市民が参加・体験するワークショップを実施しました。

テーマ	講 師		実施日時	実施場所	参加人数 (人)
ふくやまの伝統芸能「二上りおどり」	星野 由幸 大庭 三枝	福山市古典芸能保存会会長 教育学部准教授	7月29日(土) 10:30～12:00	本学 実技演習室	7
まちをつくろうワークショップ ～ 広場の模型を作る ～	高橋 美佳	非常勤講師	8月6日(日) 13:30～17:00	本学 小講義室B	8
日本の伝統文化「こぎん刺繍」の理解と技術の伝承	山本 百合子	非常勤講師	9月7日から 11月28日まで 全3回 10:00～12:00	本学 図画工作室	31 延べ人数
ヨガ(1)	西崎 裕美	非常勤講師	10月7日(土) 10:00～12:00	本学 実技演習室	8
ヨガ(2)	西崎 裕美	非常勤講師	10月21日(土) 11:00～12:30	本学 実技演習室	11
中国の食文化体験 ― 水餃子作り	張 治清 劉 郷英	非常勤講師 教育学部教授	11月4日(土) 9:00～14:00	本学 家庭科調理室	17
			合 計	年間6回	82

2 特別講演会実施報告書

[illegible]

6 大学エクステンション連続講座

『びんご圏域 6 大学の人気講座紹介！！第 2 弾』

講師：長崎 信浩 福山大学薬学部薬学科教授
上別府 隆男 福山市立大学都市経営学部都市経営学科教授

日時：2017 年（平成 29 年）5 月 13 日（土） 13:00～16:00

場所：岡山県笠岡市民会館

5 月 13 日（土），岡山県笠岡市民会館において、『びんご圏域 6 大学の人気講座紹介！！第 2 弾』を開催し，福山大学薬学部長崎信浩教授が「くすりのこと，正しく知って，正しく使おう～薬剤師をうまく利用しよう」，本学都市経営学部上別府隆男教授が「ミャンマーの新政権下の諸改革と高等教育」をご講演されました。

■「くすりのこと，正しく知って，正しく使おう～薬剤師をうまく利用しよう」

（長崎 信浩 福山大学薬学部薬学科教授）

薬の歴史として，医学の始祖は古代ギリシャのヒポクラテス，中世では化学技術の発達により薬剤師・薬局の誕生や医薬分業（医師と薬剤師）が確立し，日本では江戸時代に漢方医学が著しく発展し，明治時代に西洋医学が導入された。

また，我が国の死因別死亡者割合，国民医療費の増高，そして高齢化により肺炎による死亡が増加している原因は口腔内の雑菌が肺に入ってしまうことである。国民医療費が 40 兆円を超える中，今後も伸びていく医薬品費の抑制には後発医療品（ジェネリック）が欠かせない。

さらに，処方薬と市販薬の違いや使い方，薬の飲み忘れを防止する方法，かかりつけ薬局やお薬手帳の活用など，身近な薬剤師に気軽に相談することが大事である。



講座の様子（長崎先生）

■「ミャンマーの新政権下の諸改革と高等教育」

（上別府 隆男 福山市立大学都市経営学部教授）

まず，ミャンマーの政治情勢としては 2011 年に軍事政権から民政移管したが，いまだ軍部が中心となって民主化・市場経済化が推進されている。高等教育の歴史を振り返る中で，現在のミャンマーの高等教育の特徴として，高等教育機関はすべて国立であること，原則英語による授業で一方的な講義，暗記・試験重視の成績評価となっていること，また，キャンパスが都市部から離れているため学生・教員も長距離の移動を強いられている。

近年，海外企業の進出が急増しており，人材需要の拡大に対応できるような就業力をつける大学改革が求められている。一方，欧米諸国の経済制裁中も日本は国費留学生奨学金を継続するなど，ミャンマーからの海外留学先はロシア，タイに次いで日本が第 3 位の状況で，我が国の国際協力・支援の必要性が重要となっている。



講座の様子（上別府先生）

（今回の講演は，6 月に笠岡ケーブルテレビで放映されました。）

特別企画 6大学エクステンション連携講座「びんご圏域6大学の人気講座紹介！！ 第2弾」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)5月13日(土) 14:00～16:00

2. 場所 笠岡市民会館

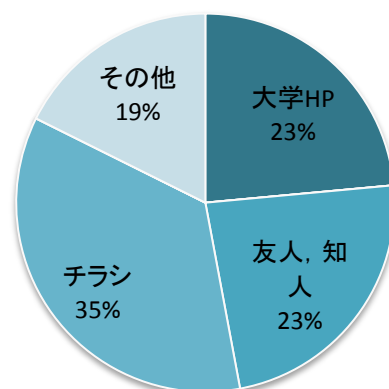
3. 参加者	参加内訳	
	参加(人)	
	一般	スタッフほか
	40	25 15

4. アンケート集計結果

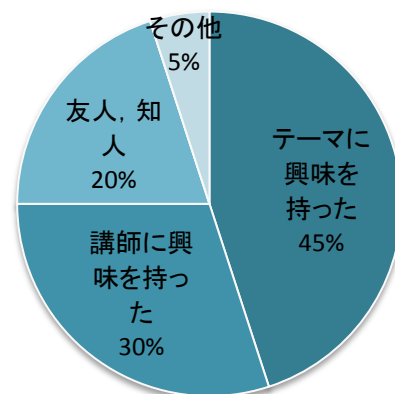
回収(枚)	回収率
15	60%

アンケート項目

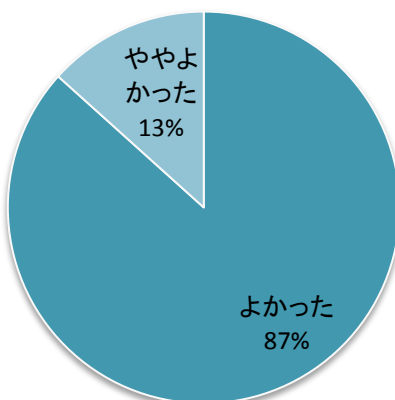
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	0
広報かさおか	0
大学のホームページ	4
福山市立大学	(3)
無記入	(1)
友人, 知人	4
公共施設に配布してあるチラシ	6
福山市	(2)
無記入	(2)
その他	3
学校の先生の勧め	(2)
大学の先生の紹介	(1)



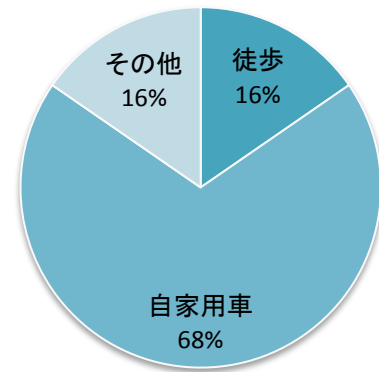
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	9
講師に興味を持ったから	6
実施場所が便利だから	0
友人, 知人に勧められて	4
なんとなく	0
その他	1
学校の先生の勧め	(1)



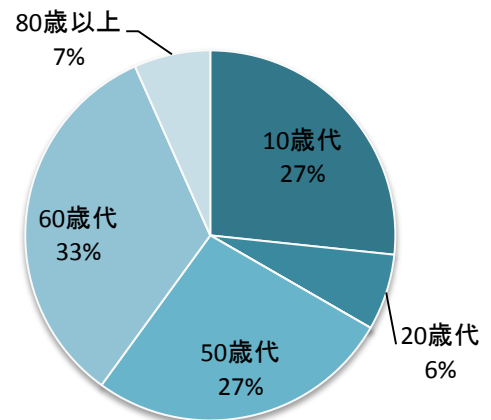
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	13
ややよかった	2
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



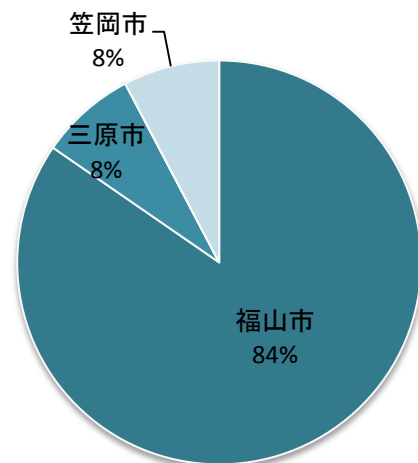
4.来場のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	0
徒歩	2
自家用車	9
タクシー	0
その他	2
電車	(2)



5.年齢	
10歳代	4
20歳代	1
30歳代	0
40歳代	0
50歳代	4
60歳代	5
70歳代	0
80歳以上	1



6.お住まい	
福山市	11
三原市	1
尾道市	0
府中市	0
世羅町	0
神石高原町	0
笠岡市	1
井原市	0



格差社会における中国の流動児童の教育現状と課題

ー北京の例を中心にー

講師：張 燕（元中国北京師範大学教育学部教授）

日時：2017 年（平成 29 年）5 月 19 日（金） 10：40～12：10

場所：本学 中講義室 A

講座では、本学教育学部の劉郷英教授が通訳を担当し、本学教育学部 1 年生 98 名と市民 23 名及び本学教職員数名の参加がありました。

張燕先生は北京市在住の「流動人口」^{注1}である農民出稼ぎ労働者家庭に対する育児支援組織である「四環遊戯グループ」の創始者であり、これまでの取り組みを紹介しました。

中国では 1980 年代以降、改革開放政策により市場経済システムへの転換が行われ、都市部と農村部の格差がより拡大していった。農村出稼ぎ労働者が都市部に移動し、その子どもたち＝「流動児童」にも教育や医療などでの課題が現われてきました。

張燕先生は自分が指導していた北京師範大学の学生たちを率いて、2004 年 4 月から「四環遊戯グループ」を立ち上げ、四環総合農産物市場で生活していた子どもたちに、遊ぶことから“ことば”や“社会性”などの規則的な生活習慣を身につけさせ、同時に保護者には育児に対する自信をもたせ、地域の人たちや大学生ボランティアの人たちと互いに助け合い教育していくことを実践してきました。この実践を通して、都市と農村の狭間で生きている子どもたちは、人間として成長発達し、生きる喜びを味わい、農民出稼ぎ労働者として都市に入った保護者たちは自分たちの文化の良さに気づくようになり、誇りを持って子どもたちのために手づくりのおもちゃを作ったり、遊びを考えたりして、育児の喜びを味わい、子どもたちの教育に責任を持つようになった。また、大学生ボランティアたちも教育実践の場として社会貢献しながら、フィールド研究の場として活用して、これまで中国社会で遭遇したことのない難しい課題に挑戦し模索してきました。

最後に、張燕先生は力強く「68 年の歴史を持つ中華人民共和国には、いまだに『児童福祉法』がありません。しかし、みんなが力を合わせて、子どもの権利・社会保障を改善していけば、自ずと社会は発展します！」と語りました。

日本の社会制度や行政システムと全く異なる中国の話を理解するにはなかなか至難のことですが、受講した本学の学生も市民たちも真剣な眼差しで聞き入ってくださいました。真剣に話を聞いてくださった受講者に対して、張燕先生は思わず深々とお礼をしながら「みなさん、真面目にご静聴くださいまして、心から感謝申し上げます！」と挨拶しました。会場一同盛大な拍手を送りました。

日本と中国、互いに近くて遠い存在でしたが、このような国際交流を通して、その距離は一気に縮むことができました。「現在の日本が抱える教育現場の問題に、まさしく警鐘となる資源がいっぱいあり、参考になりました」「教育者を目指している私にとってとても貴重な経験になりました」という来場者の声もありました。



講座終了後の張燕先生



講座の様子

注1. 中国戸籍制度下にある概念であり、戸籍の所在地を離れて他の地域へ移動する人口を指す。国際的には、こうした人口を「国内移民」（internal migration）と呼ぶこともある。中国の流動人口は、主として農村地域から都市部へ、経済の未発達地域から経済の発達地域へ、中部・西部地域から東部沿海地域へ移動する人口

2017年度(平成29年度) 国際交流「格差社会における中国の“流動児童”の教育現状と課題
— 北京の例を中心に —」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)5月19日(金) 10:40～12:10

2. 場所 本学 中講義室A

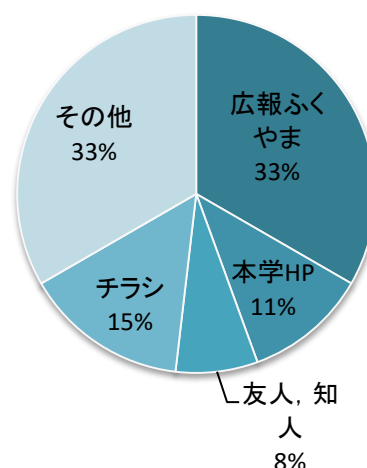
参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	118	121	114	2	5	97%

4. アンケート集計結果

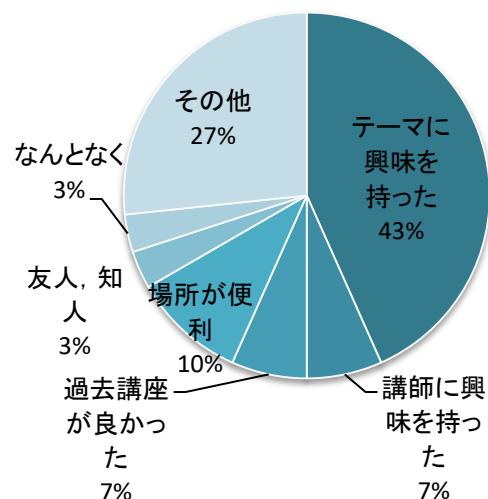
回収(枚)	回収率
24	21%

アンケート項目

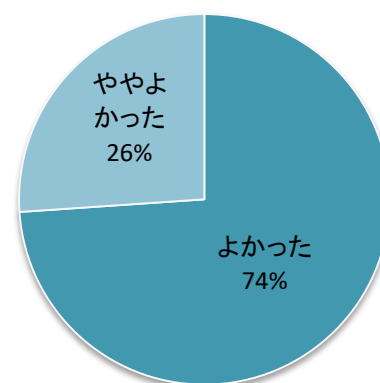
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	9
本学のホームページ	3
友人, 知人	2
公共施設に配布してあるチラシ	4
本学からの郵便でのご案内(DM)	0
その他	9
授業	(9)



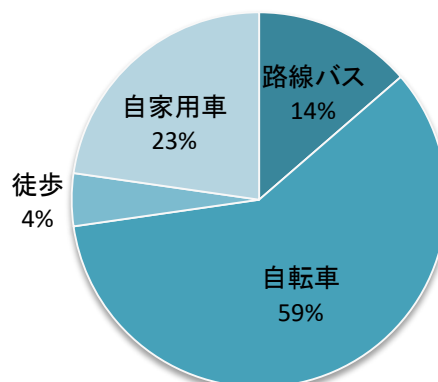
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	13
講師に興味を持ったから	2
過去に受講した講座が良かったから	2
実施場所が便利だから	3
友人, 知人に勧められて	1
なんとなく	1
その他	8
無記入	(8)



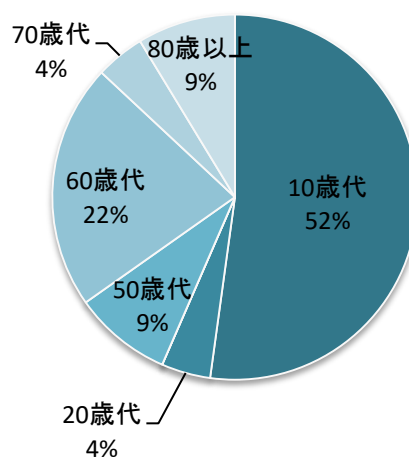
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	17
ややよかった	6
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



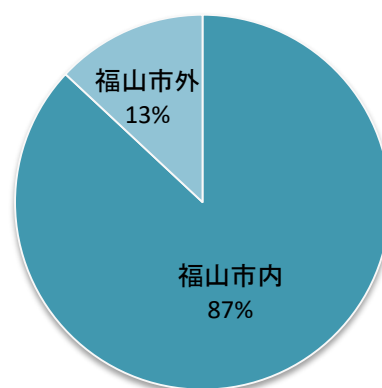
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	3
自転車	13
徒歩	1
自家用車	5
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	12
20歳代	1
30歳代	0
40歳代	0
50歳代	2
60歳代	5
70歳代	1
80歳以上	2



6.お住まい	
福山市内	20
福山市外	3



特別講演会 フィンランドの ネウボラシステムと 日本版への学び

講師：マリア・コッコ

マルクス・コッコ（駐日フィンランド大使館 報道・文化担当参事官

正保 正恵（本学教育学部教授）

日時：2017 年（平成 29 年）9 月 16 日（土） 13:30～15:30

場所：本学 大講義室

■NEUVOLA SYSTEM IN FINLAND（マリア・コッコ）

フィンランド大使館参事官のマルクス・コッコさんと妻マリアさんは、2014 年ヘルシンキ生まれの長男と、2017 年 5 月東京生まれの次男の 4 人で暮らしている。今回、ヘルシンキで生んだ時の体験、また次男を里帰りしてネウボラへ連れて行った体験を踏まえ、フィンランドのネウボラシステムについて語っていただいた。マリアさんの PPT 資料には、自分の肩書として最初に 2 児の母、科学修士、そして職業が載せてあり、2 児の母であることが社会的なアイデンティティの一つにもなっている。

フィンランドでは、妊娠が分かった時点から、ネウボラに通って出産、子育て中の子どもの成長のみではなく、親たちや他の兄弟との関係などすべての悩み地域の保健師が支えてくれている。

ネウボラで働くための人材は、大学で助産師資格のための 270 単位 4.5 年か、看護師資格のための 240 単位 4 年間の学びが必要である。

さらに、ネウボラの特徴として、妊娠中の家庭訪問、出産後の家庭訪問がある。これらは、ネウボラに通うだけではなく安心感を与えてくれている。

■Neuvola - Father's point of view（マルクス・コッコ）

参事官のマルクス・コッコさんは、普段のフィンランドの広報のみではなく、父親としてどうかかわっているのかという点でも話された。フィンランドでは、子どもが生まれると、授乳以外のすべての「義務」を二人で分け持つ。実際にコッコさんも 4 時には帰宅（これはフィンランドでは普通の働き方）し、育児をすべて一緒にこなしている。

■フィンランドのネウボラのリフォームと日本からの学びどころ（正保正恵）

正保は、学内メンバーらと 2017 年度本学の重点研究としてネウボラ（包括的な子育て支援）の研究に取り組んでおり講演会直前の 9 月 6 日から 13 日までフィンランド（とスウェーデン）に行ってきた。9 年前にも行ってネウボラでのインタビューも行っているが、今回フィンランドは 2015 年からファミリーセンターへの衣替えを順次行っていることが分かった。ファミリーセンターは、従来のネウボラのほかに、様々な専門職（発達障害などへの対応、歯科、医師など）が同じ建物で待っていてくれている。また、PC などを使った双方向のネットワークも利用しながら、より専門的な対応が可能となっていた。

日本の学びどころの一番のポイントは、子どもは社会で育てるという共通理解なのではないかと実感した。



右：マリア・コッコさん
左：山田アリヤさん（通訳）



右：マルクス・コッコさん
左：山田アリヤさん（通訳）



講師陣と学内メンバー

2017年度(平成29年度) 特別講演会「フィンランドのネウボラシステムと日本版への学び」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)9月16日(土) 13:30～15:30

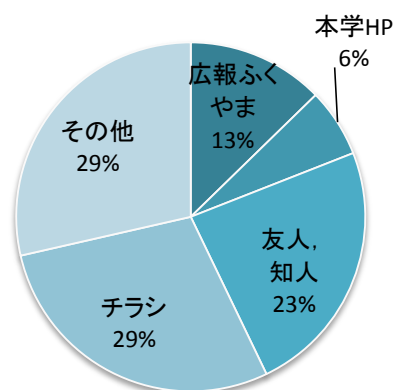
2. 場所 本学 大講義室

3. 参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	127	121	90	22	9	71%

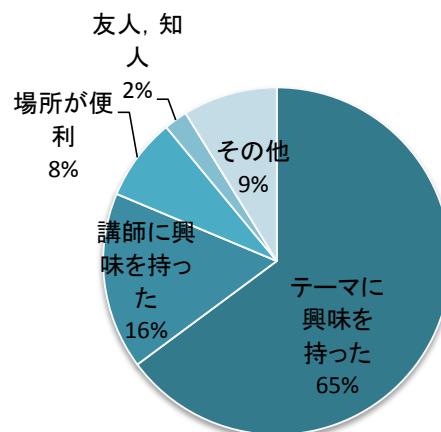
4. アンケート集計結果	回収(枚)	回収率
	68	61%

アンケート項目

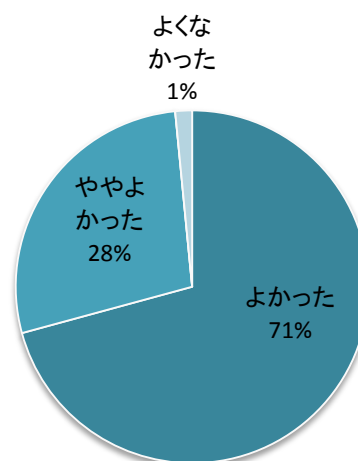
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	8
本学のホームページ	4
友人, 知人	15
公共施設に配布してあるチラシ	18
その他	18
職場	(8)
新聞	(4)
福山フィンランド協会	(2)
その他	(4)



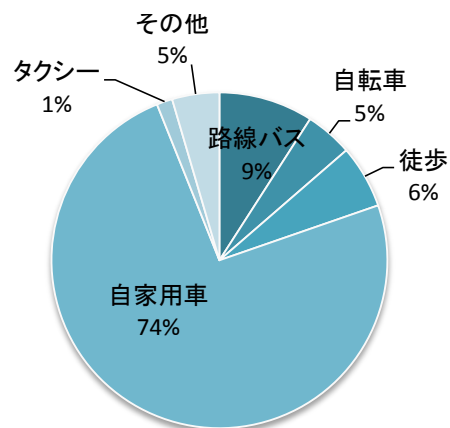
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	59
講師に興味を持ったから	15
過去に受講した講座が良かったから	0
実施場所が便利だから	7
友人, 知人に勧められて	2
なんとなく	0
その他	8
勉強のため	(5)
上司からの勧め	(1)
家族の勧め	(1)
無記入	(1)



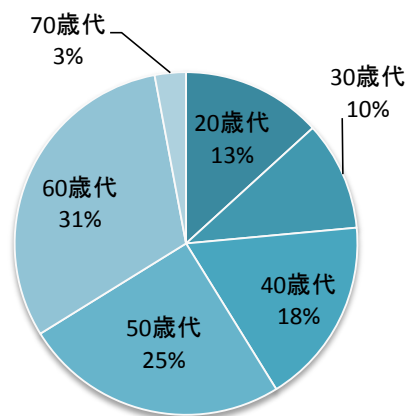
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	46
ややよかった	18
あまりよくなかった	0
よくなかった	1



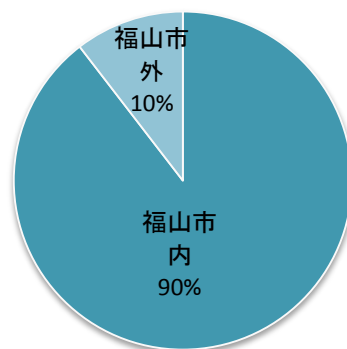
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	6
自転車	3
徒歩	4
自家用車	49
タクシー	1
その他	3
家族の送迎	(2)
電車	(1)



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	9
30歳代	7
40歳代	12
50歳代	17
60歳代	21
70歳代	2
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	60
福山市外	7



特別講演会 「アラスカの大自然で学ぶ」

講師： Michelle Bartlett（アラスカ大学フェアバンクス校・夏季プログラムディレクター）

Kim Aragon Stewart（アラスカ大学フェアバンクス校・外国語文学科講師）

福田 正己（本学名誉教授、北海道大学名誉教授）

澤田 結基（本学都市経営学部准教授）

日時：11月2日（木） 16：30～18：30

場所：本学 中講義室 A

講演会の概要

本講演会は、本学とアラスカ大学（アメリカ合衆国）の交流協定に基づく海外プログラム「環境開発実習」の開始5年目を記念して企画された。環境開発実習は本学都市経営学部の専門科目に位置付けられているプログラムで、アラスカ大学フェアバンクス校に2週間滞在して海外の自然と文化を深く学び、英語スキルの向上を目指すものである。講演会では、アラスカ大学から2名の講師、また本学名誉教授で環境開発実習の構築にご尽力いただいた福田正己先生をお招きして、環境開発実習とアラスカについて解説する4部構成で行った。アラスカ大学の2名の講師による講演では日本語の同時通訳を行うことで、参加者の便宜を図った。また講演中には、オーロラの映像に合わせた「アベ・マリア」のサプライズ演奏があり、アラスカの雄大な大自然の風景に花を添えた。

1. 環境開発実習の紹介（ミッシェル・パートレット）

環境開発実習は、アラスカ大学が受け入れている海外交流プログラムとして、最も大きなものである。このプログラムが発足した経緯は、当時アラスカ大学で勤務していた福田先生との出会いから始まった。これまで多くの研究者が学生を連れてくると話してくれたが、本当に連れてきてくれたのは福田先生が初めてだった。このプログラムを実施することは私たちにとってとても楽しみであり、協力に感謝している。

2. 英語会話の冒険（キンバリー・スチュワート）

アラスカ大学滞在中に行っている英語コミュニケーションの講義は、教室の外へ飛び出してフェアバンクスの町で行うことに特徴がある。学生たちは、与えられた課題をこなすため、お店やダウンタウンなどで市民に質問して答えを聞き出すことを求められる。こうした体験を通じて、英語を使ってコミュニケーションができる感覚を身に付けてもらうように工夫している。

3. アラスカの自然を学ぶ（福田正己）

なぜアラスカなのか。それは、日本とは全く異なる雄大な自然があるからである。アラスカ州は日本の約4倍の面積があるが、住民はわずか74万人で、手つかずの自然が広がっている。冬は寒くマイナス40℃になる日もあるが、空にはオーロラが舞う。夏は涼しくとても快適である。自然の厳しさとは対比的に人は暖かく、学生を連れて行くのにこれほど良いところはない。日本とは全く違う自然と文化に触れ、アラスカならではのフロンティア精神を学んで欲しいとの思いからこのプログラムをスタートさせた。

4. アラスカから日本を眺める（澤田結基）

アラスカは日本から最も近いアメリカであり、歴史的にも日本との関わりが深い。寒かった旧石器時代には、北海道が大陸と地続きで、アラスカ・シベリア・日本が共通性の高い石器文化を有していた。昭和に入ってからフランク安田が疫病で全滅の危機にあった北極海沿岸の先住民を先導して内陸部へ移住し、危機から救っている。戦時中は日本とアメリカの交戦が行われた悲しい歴史もある一方、戦後は福山の日本鋼管製のパイプがアラスカの石油パイプラインに使われるなど交流が多く、福山市とも縁がある。



講座の様子

2017年度(平成29年度) 特別講演会「アラスカの大自然で学ぶ」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)11月2日(木) 16:30~18:30

2. 場所 本学 中講義室A

3. 参加者

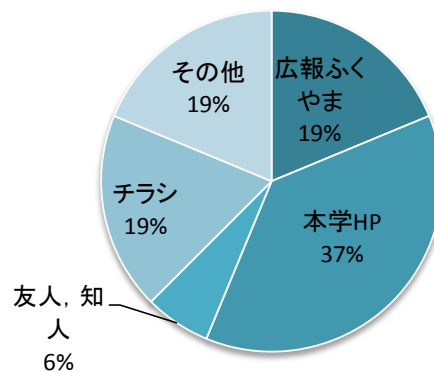
事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
		事前申込	当日申込	スタッフほか	
22	45	9	29	7	41%

4. アンケート集計結果

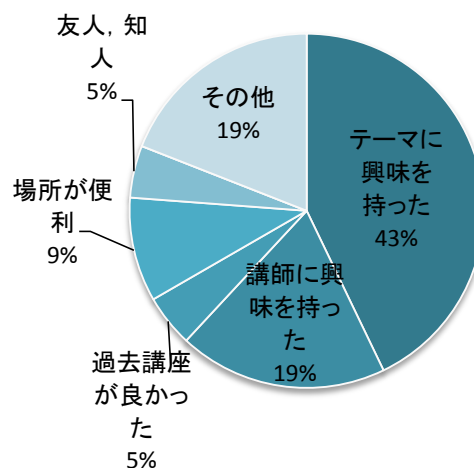
回収(枚)	回収率
17	45%

アンケート項目

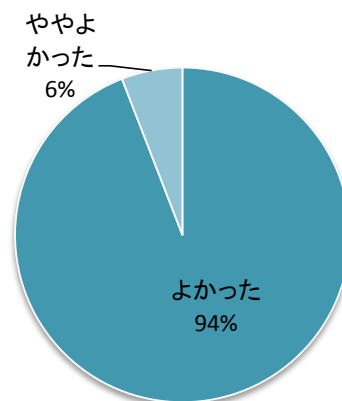
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	3
本学のホームページ	6
友人, 知人	1
公共施設に配布してあるチラシ	3
その他	3
先生から	(2)
ポータル	(1)



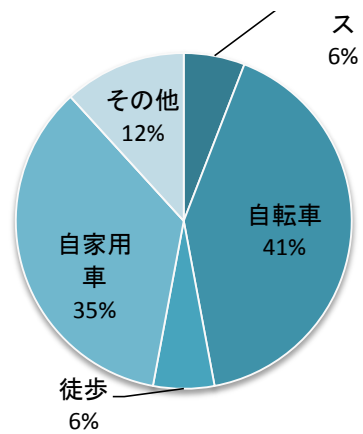
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	9
講師に興味を持ったから	4
過去に受講した講座が良かったから	1
実施場所が便利だから	2
友人, 知人に勧められて	1
なんとなく	0
その他	4
アラスカ実習を考えている	(3)
無記入	(1)



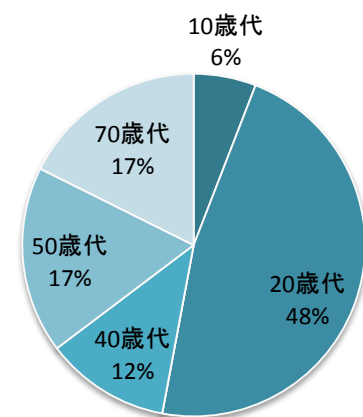
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	16
ややよかった	1
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



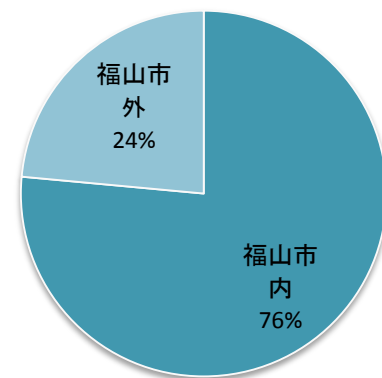
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	1
自転車	7
徒歩	1
自家用車	6
タクシー	0
その他	2
電車	(2)



5.年齢	
10歳代	1
20歳代	8
30歳代	0
40歳代	2
50歳代	3
60歳代	0
70歳代	3
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	13
福山市外	4



知の深化① 女性と政治：女性の参加で政治は変わる

講師：相内 眞子（北翔大学前学長・名誉教授）

日時：2017 年（平成 29 年）6 月 17 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 中講義室 A

昨年 10 月に衆議院選挙があり、女性議員は講演会当時より若干増えましたが、やっと 1 割に届いたところ。国際比較では最下位集団に属する状況に変わりはありません。安倍政権では「女性活躍」が謳われ、「女性が輝く社会」が目指されたにもかかわらず、政治領域では女性は十分な活躍ができず、輝きを放てないでいます。

講演では、アメリカの事例研究を参考に、ジェンダー・ポリティックスの視点から、この「女性の政治的過少代表」の要因を、政策決定過程に、(1) 女性はなぜ少ないのか、(2) 女性はどうすれば増えるのか、(3) 女性が増えたら何が変わるのか、の 3 点から考察いたしました。

(1) については、およそ 4 点の原因が挙げられ、それらは、①「女性は家庭責任・育児責任を担うべきだ」「女性に政治的な能力はない」とする性差別的な固定観念、②女性の高等教育や社会進出に対する消極的・否定的な地域の政治文化、③上位の議会が求める議員のキャリアや専門性、④一人しか当選できない小選挙区制度であり、それぞれ女性の政治的進出を阻む大きな壁であることがわかりました。

(2) については、(1) の壁を崩していくことに加えて、有効な方法があります。それは、少数派が多数派内で影響力を持つとされる 30% という割合に着目した、クリティカル・マス（決定多数）という概念に基づくものです。政策決定過程において、最低限この割合を実現するためには、ポジティブ・アクション（積極的差別解消策）が必要になりますが、その最も効果的な方法が、女性に一定数の議席を割り当てるジェンダー・クォータ制度です。政府は、「2020 年までに、指導的地位に女性が占める割合が、少なくとも 30% 程度になることを期待する」としていますが、この指導的地位には、当然ながら議員が含まれます。積極的な手段を講じなければ、この目標の達成は難しいでしょう。実は、政府がこの目標を掲げたのは平成 15 年（2003 年）の男女共同参画推進本部においてであり、その後平成 17 年（2005 年）には閣議決定までしています。以来、時の経過と女性の現状を見れば、政府がこの課題解決に真剣に注力してきたかはまことに疑わしい。そして、この閣議決定から 10 年後の平成 27 年（2015 年）、「すべての女性が輝く社会」を目指すとして「女性活躍推進法」が成立いたしました。しかしながら、この法律は、女性の経済活動や就業上の活躍支援に限定され、政治における女性の活躍には一切言及しておりません。こうした女性の政治的過少代表状態を憂慮する超党派の議員たちが、「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律案」を前国会に提出しましたが、結局突然の解散で審議されず廃案となりました。成立を期して再度提出される予定と聞いておりますが、「男女均等」の候補者選考は政党の努力義務に留まるため、実効性の担保には国民の監視が必要と思われます。ジェンダー・クォータ制度が女性の議会進出を促進する効果は明らかなです。女性国会議員比率の国際比較で、6 割を超えるトップのルワンダをはじめ、上位に位置するアフリカや中南米諸国のほとんどが、ジェンダー・クォータを法制化しており、新興諸国が女性の政治参加に寄せる期待の大きさが見て取れるといえましょう。

(3) 議会に女性が増えれば、政治は変わります。ジェンダー・ギャップ研究は、政党支持や政策課題、政策志向・優先順位などにおける性差を明らかにしてきましたが、女性比率が高い議会ほど、教育や福祉、家族に関わる議題が審議され、成立を見る確率が高まることがわかっています。比較の材料が豊富なアメリカの例ではありますが、日本における地方議会でもその傾向が見えてきています。「女性は（男性中心の政治との）違いを作り出す」＝”Women Make a Difference”。女性の政治的進出の意義を象徴するフレーズです。さらに、ジェンダー・ギャップは、議員間だけではなく有権者間にも存在します。政策志向や優先順位が女性議員と女性有権者で共有され、女性議員が議会で女性の利益を代表するという手応えが得られれば、議会内外で女性の連携が進み、女性有権者が女性議員を継続して選出するという、積極的な循環が生まれるでしょう。すなわち、議員としてばかりではなく、有権者としても、「女性の参加で政治は変わる」のです。

2017年度(平成29年度) 公開講座「女性と政治:女性の参加で政治は変わる」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)6月17日(土) 14:00～15:30

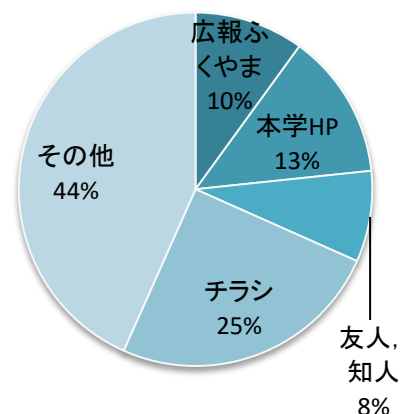
2. 場所 本学 中講義室A

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	95	81	66	5	10	69%

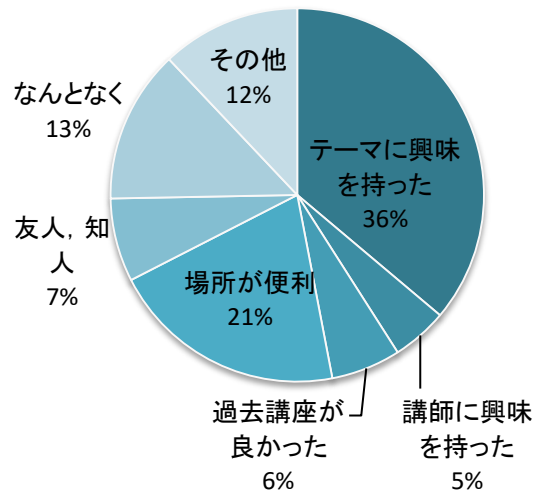
回収(枚)	回収率
59	83%

アンケート項目

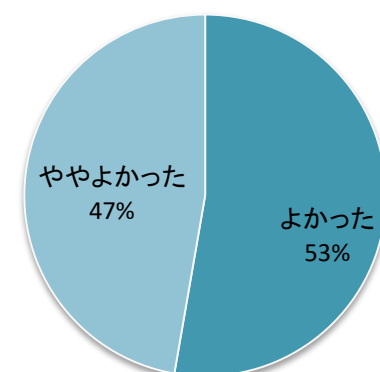
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	6
本学のホームページ	8
友人, 知人	5
公共施設に配布してあるチラシ	15
その他	26
授業	(21)
先生から	(3)
無記入	(2)



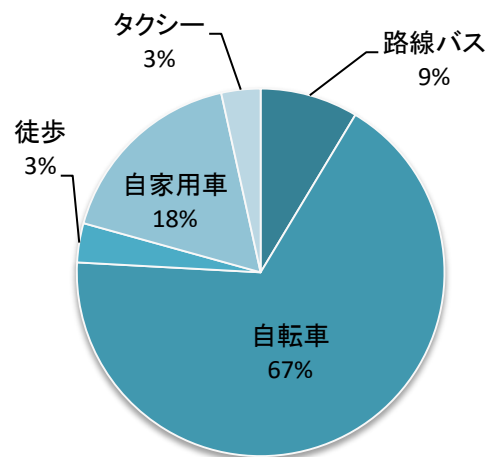
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	30
講師に興味を持ったから	4
過去に受講した講座が良かったから	5
実施場所が便利だから	17
友人, 知人に勧められて	6
なんとなく	11
その他	10
授業	(7)
先生から	(2)
無記入	(1)



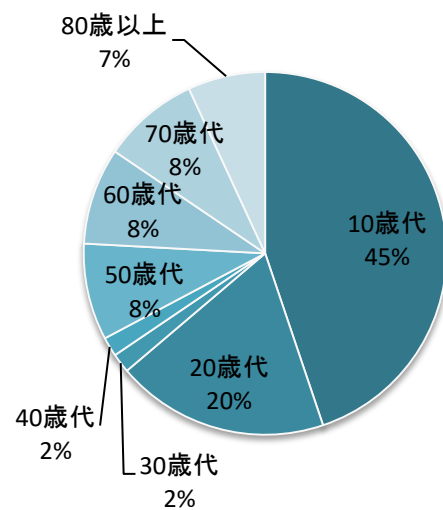
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	29
ややよかった	26
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



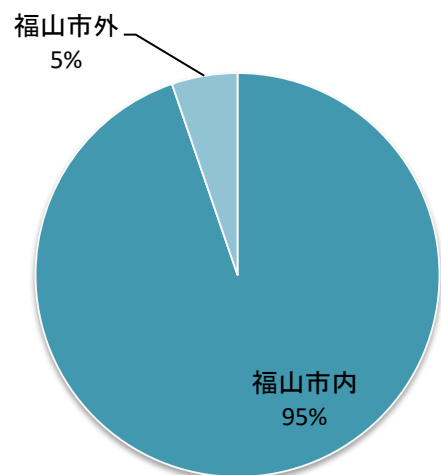
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	5
自転車	39
徒歩	2
自家用車	10
タクシー	2
その他	0



5.年齢	
10歳代	26
20歳代	11
30歳代	1
40歳代	1
50歳代	5
60歳代	5
70歳代	5
80歳以上	4



6.お住まい	
福山市内	54
福山市外	3



知の深化② 「赤ずきん」を読んで、文学の森で〈迷子〉になろう！！

講師：岡光 一浩（山口大学名誉教授）

日時：2017 年（平成 29 年）7 月 15 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 中講義室 A

（講演要旨）

深層に降りて読者個人の「物語」として読むことができる、文学に相応しいものをもっているグリムの「赤ずきん」を、様々な角度から「誤読」して、「文学を読む」とはどういうことかについてお話した。

グリム童話は民衆から聞き取った話を忠実に再現した昔話ではなく、グリムによって「書かれた」、創作の要素の強い収集童話であるが、このことは「赤ずきん」についても言える。グリムの「赤ずきん」はそれ以前に発表された、性的でエロティックな、15 世紀の「おばあさんの話」や 17 世紀のペローの「赤ずきん」をまねているが、それらとははっきりとした違いも見せている。とりわけ、展開が説明的で理詰めであることや森の描写などのドイツ的な書き換えによっても、そのことは明らかである。では、なぜグリムはフランス的であった「赤ずきん」に様々な変更を加え、ドイツ的な話に脚色したのか。彼らはそこに自分たち独自のメッセージを盛り込んだのである。

ところで、グリムが童話集を刊行したことには政治的・社会的な意図があった。19 世紀初頭のドイツはナポレオンに支配されていて、政治に対して諦めがあり人々には活気がなかった。しかし、当時の知識人たちは、とりわけロマン派と言われる文化人たちはドイツ民族としての自覚と誇りをもって人々の意識を精神的に高めようとして、民謡や昔話などの収集に励んだ。その代表的な著作がブレンターノの民謡集『少年の魔法の角笛』である。グリム兄弟もこうした運動に同調して、ドイツの現状に対する反抗と告発の気持をもって古い昔話を収集し、「グリム兄弟によって収集された子どもと家庭のための童話集」というタイトルをもつ、156 話の童話集を刊行した(1812/1815 年)。グリム童話には、政治的に劣勢にあるドイツとドイツ人に過去の精神的遺産をあらためて突きつけ、ドイツ民族としての魂を忘れさせないようにする、という意図があった。

そうしたグリムの政治的なメッセージを最も明瞭に読み取れるのが「赤ずきん」である。今回、「文学を読む」試みとして、「赤ずきん」において、ナポレオンに虐げられているドイツ民族を精神的に鼓舞し「ドイツ民族よ、ナポレオンに抗して立ち上がれ」という熱いメッセージが秘められている、童話集刊行時のグリムの心を、登場人物や物語の背景・展開を中心に具体的に「誤読」した。それは十分に首肯できる解釈であったであろう。

しかし、ドイツ民族を精神的に鼓舞する物語として「赤ずきん」を読む「誤読」の試みは、「文学を読む」とはどういうことか、必ずしも十全に答えてくれるものではない。「作者の死」を超えて作者の意図を離れ、読者として作品そのものに自分自身に関わらせて「誤読」することこそが、「文学を読む」最も基本的な読み方だからである。したがって次に、「赤ずきん」に私たちの心を重ね、そこに人生いかに生きるべきかという人間の普遍的な成長物語を「誤読」した。自己実現化には心の奥底の普遍的無意識との細やかな対話が不可欠であるという、ユングの深層心理学を援用しての「赤ずきん」の具体的な「誤読」であり、人間の普遍的な自己形成の道が明らかになった。

「文学を読む」場合に重要なのは、作品にあることを知るだけでなく、そこに読み手として自由に考えをめぐらし自分に関わらせて「誤読」することであり、読者にはそのことが求められている。私たちは複雑さを増した現代社会の諸問題を、ひとつの「正解」を求めて急ぐのではなく、「迷子」になって答えのない問題を克服していかなければならないが、そのためには、言葉で表現できないものを「文学の言葉」を用いて表現する文学を、様々な角度から「誤読」することが役立つであろう。「文学を読む」ことは、私たちにオルタナティブの存在することを気づかせてくれるのである。

2017年度(平成29年度) 公開講座 「赤ずきん」を読んで、文学の森で<迷子>になろう!! 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)7月15日(土) 14:00～15:30

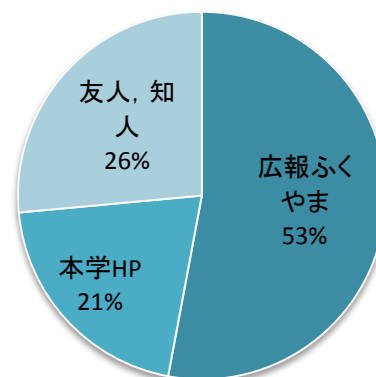
2. 場所 本学 中講義室A

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	48	56	42	3	11	88%

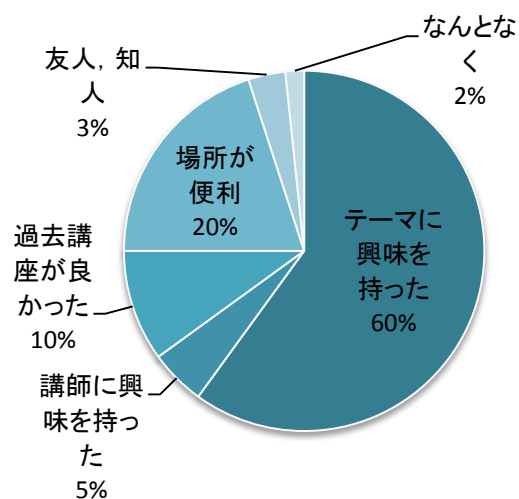
回収(枚)	回収率
37	82%

アンケート項目

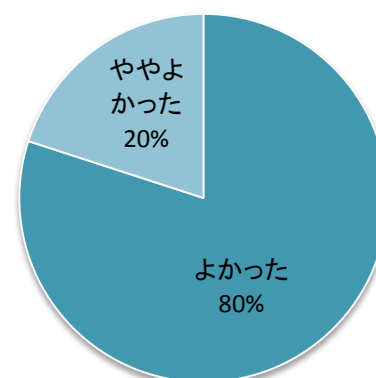
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	18
本学のホームページ	7
友人, 知人	9
公共施設に配布してあるチラシ	0
その他	0



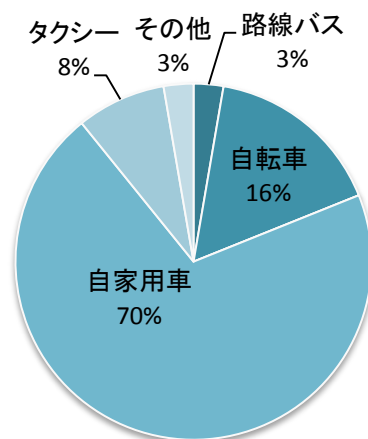
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	36
講師に興味を持ったから	3
過去に受講した講座が良かったから	6
実施場所が便利だから	12
友人, 知人に勧められて	2
なんとなく	1
その他	0



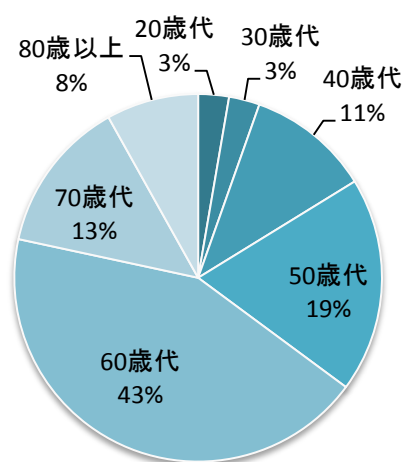
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	28
ややよかった	7
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



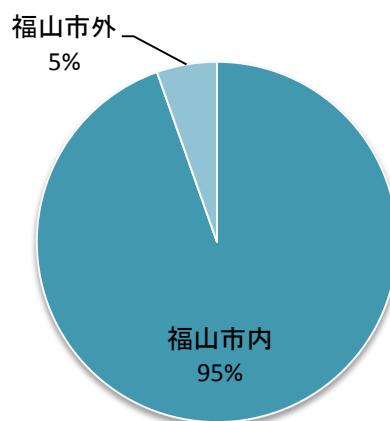
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	1
自転車	6
徒歩	0
自家用車	26
タクシー	3
その他	1



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	1
30歳代	1
40歳代	4
50歳代	7
60歳代	16
70歳代	5
80歳以上	3



6.お住まい	
福山市内	35
福山市外	2



知の深化③ 広島豪雨災害を踏まえた防災対応と福山市への知見

講師：松田 智仁（日本都市計画学会 元「中国四国支部広島豪雨災害・防災まちづくり検証特別委員会」土地利用検証部会長）

渡邊 一成（本学都市経営学部教授）

日時：2017 年（平成 29 年）8 月 5 日（土） 14:00～15:30

場所：本学 中講義室 A

本講座のねらい

2014 年 8 月 20 日未明に発生した広島豪雨災害は、77 名の尊い命を奪い、そして住まいをはじめ市街地や農地等に甚大な被害をもたらした。今後このような豪雨災害は、わが国のどの地域においても起こり得る災害と言える。本講座では、日本都市計画学会中国四国支部広島豪雨災害・防災まちづくり検証特別委員会における土地利用面での検証結果を報告するとともに、福山市の防災対策への示唆を概説した。

広島豪雨災害を踏まえた防災対応

本講座では、松田氏より、広島豪雨災害の気象・土砂災害・人的被害等に関する概説の後、本日の講演が都市計画の視点からの防災対策を主として取り上げることから、都市計画に関する解説の後に、土砂災害防止関連法制度の評価と課題、被災地上流部の土地利用規制等の効果と課題、道路や小河川などの主要公共施設整備水準と課題につき説明があった。そして、これを踏まえた防災・減災に資する新たな土地利用規制や事業手法について、広島市矢口川下流部周辺地区で定められた建築物の防災機能向上を考慮した地区計画の事例、鉄筋コンクリート造の建築物を上流部に建てることによる土砂災害特別計画区域内の建築物の集団防備など、具体的な事例を交えた講演が行われた。

福山市への知見

続いて、福山市への知見として、福山市が人口減少・少子高齢化にあっても持続可能な都市であるためのコンパクトシティを目ざし現在検討中の立地適正化計画について、2017 年 3 月に公表された立地適正化基本方針に基づき、コンパクトシティ形成に合わせ、将来的に災害に強い市街地に居住を誘導できれば安心・安全に暮らすことができることや、安心・安全な暮らしに向けた取組みを確実に実施することの重要性が指摘された。そして、最後に登録有形文化財に指定されている「堂々川の砂防（砂留）」を取り上げ、自然災害の教訓を先人たちの取り組みに学び、変貌する自然と共存し、営みを続け、故郷を将来世代に伝えていくことの必要性が訴えられた。

質疑応答・受講者からの感想

松田氏の話題提供を受け、渡邊も交えた聴講者との質疑応答では「日々の暮らしに身近な防災対策」「防災への住民参加」などの質問が出され、これについて防災倉庫の設置場所やため池の安全性などについて情報提供がなされた。また、受講者からは「土地利用と豪雨災害の関係及び防災面での都市計画の在り方などがよく理解できた。」「高度成長期に無理を押して宅地開発を行い、入居して数十年経過した現在は、地域指定のジレンマがよく分かった。でも、命にかかわることであり、この問題は早急に解決する要あり。」などの感想が寄せられた。



松田氏による講演の様子

2017年度(平成29年度) 公開講座「広島豪雨災害を踏まえた防災対応と福山市への知見」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)8月5日(土) 14:00～15:30

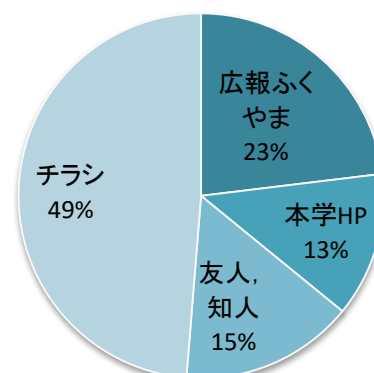
2. 場所 本学 中講義室A

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	58	74	53	11	10	91%

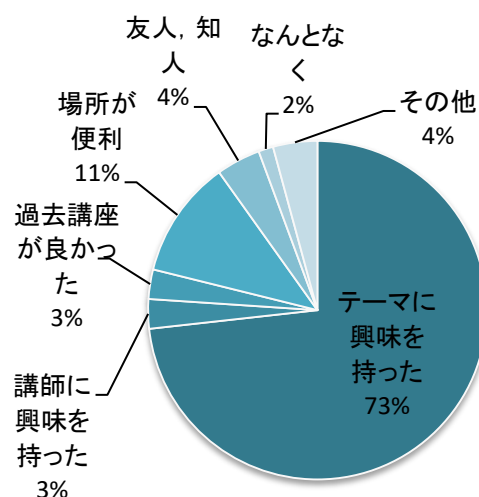
回収(枚)	回収率
56	88%

アンケート項目

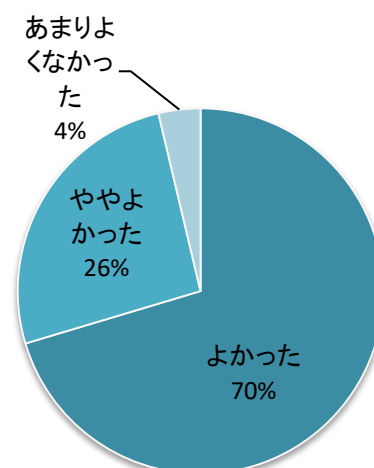
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	9
本学のホームページ	5
友人, 知人	6
公共施設に配布してあるチラシ	19
その他	0



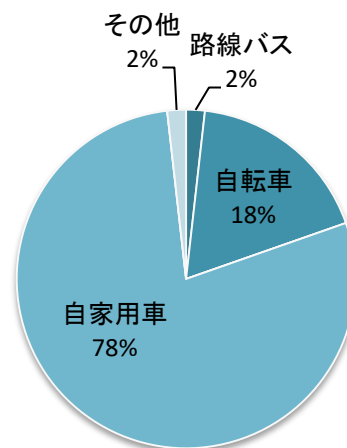
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	52
講師に興味を持ったから	2
過去に受講した講座が良かったから	2
実施場所が便利だから	8
友人, 知人に勧められて	3
なんとなく	1
その他	3
広島市佐伯区出身だから	(1)
当時, 広島へボランティアに行ったから	(1)
町内会での防災講話のための勉強	(1)



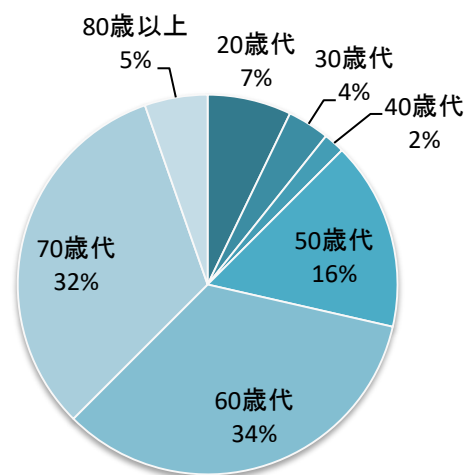
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	38
ややよかった	14
あまりよくなかった	2
よくなかった	0



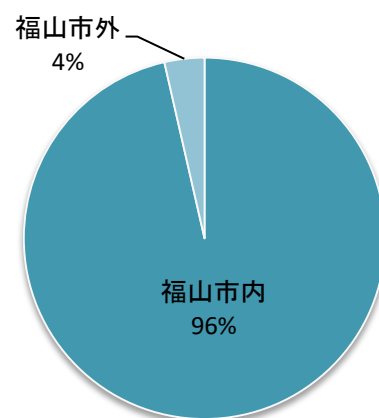
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	1
自転車	10
徒歩	0
自家用車	44
タクシー	0
その他	1
家族の送迎	(1)



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	4
30歳代	2
40歳代	1
50歳代	9
60歳代	19
70歳代	18
80歳以上	3



6.お住まい	
福山市内	54
福山市外	2



知の深化④ ブランドから組立てる地域戦略

－ 消滅可能性都市とされた田舎町の挑戦 －

講師：力武 文雄（一般社団法人アンテナさくほ 代表）

日時：2017 年（平成 29 年）10 月 7 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 中講義室 A

本年度、第 4 回公開講座は長野県佐久穂町で地域おこしに取り組む、一般社団法人アンテナさくほ代表の力武文雄さんを講師に迎え、ブランド力による地域振興の実践についての熱のこもった講演となりました。

演題「ブランドから組立てる地域戦略ー消滅可能都市とされた田舎町の挑戦ー」とあるように、高齢化と人口減少が進む佐久穂町での挑戦について、「成功よりも失敗の方が多い。」と実直に語られるとともに、ブランド戦略を通して「まちおこしは人づくり」を改めて実感したことなど、特別なイメージのあるブランド戦略を重要かつ身近なものとして伝えていただきました。

（佐久穂町の特産品：プルーン、ブルーベリー、りんご、野沢菜漬け、カーネーション、バラ、菊、清酒）

■ブランドとは

そもそも「ブランド」とは何なのか、ブランドにはどんな種類のものがあり、何をもってブランドが作られているのかを分析されていました。「地域ブランド」の部分では、福山市のデーターを交えた話もいただき、「福山市は住みやすさで満足度の高いまちであり、そのことが魅力となる要素がある。」と、お話しいただきました。

■ブランドから組み立てる地域戦略

行政が書いた設計図や市場の論理に基づいて、大規模な開発でまちを刷新していく「設計の時代」が終わり、下からの目標をモニタリングして施設やサービスの水準を調整し、今あるストックを生かして都市の価値を高める「編集の時代」だとお話がありました。

「体系的・組織的・直接的」から「分散的・連鎖的・間接的」へと地域の中にあるものの魅力を引き出し発信していく取り組みは、参加いただいた地域活動に取り組む皆さんの参考になったように思います。

今回の講座は、講師の実践活動を通じて、自らの住むまちを考える機会となりました。



講師の力武さん



講座の様子

2017年度(平成29年度) 公開講座「ブランドから組立てる地域戦略

ー 消滅可能性都市とされた田舎町の挑戦 ー」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)10月7日(土) 14:00～15:30

2. 場所 本学 中講義室A

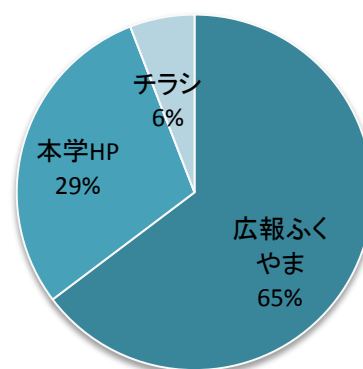
参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	23	31	19	7	5	83%

4. アンケート集計結果

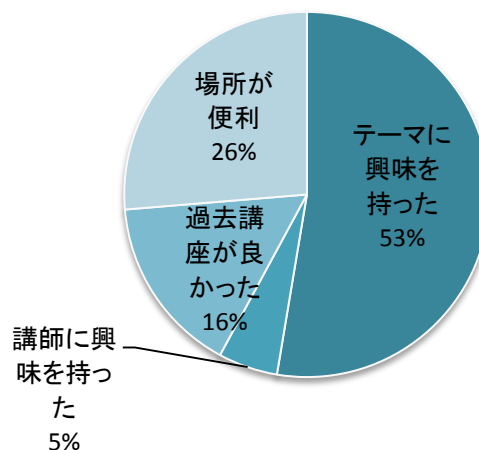
回収(枚)	回収率
22	71%

アンケート項目

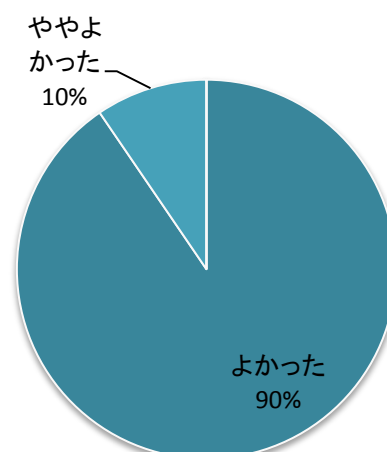
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	11
本学のホームページ	5
友人, 知人	0
公共施設に配布してあるチラシ	1
その他	0



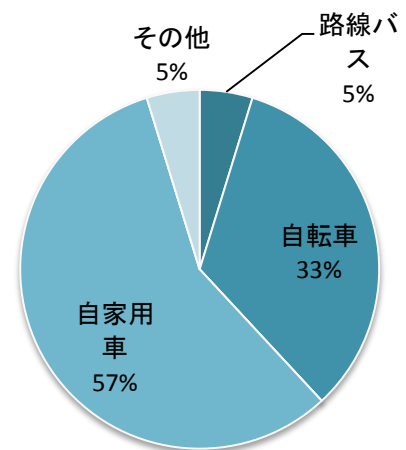
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	20
講師に興味を持ったから	2
過去に受講した講座が良かったから	6
実施場所が便利だから	10
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0



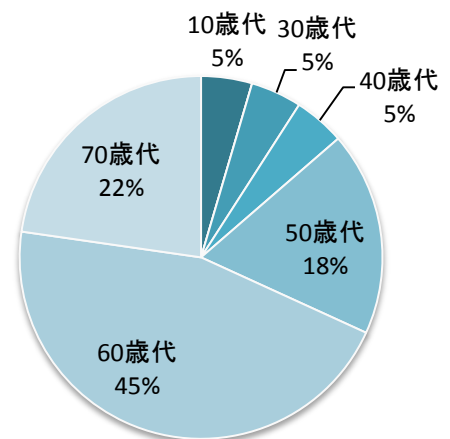
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	19
ややよかった	2
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



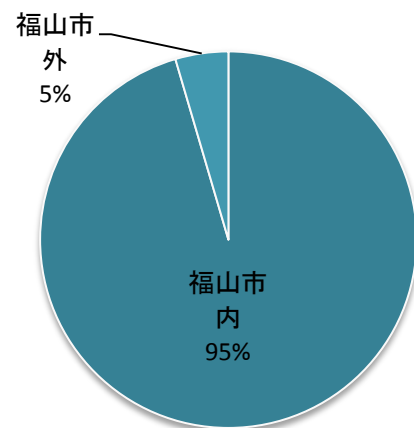
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	1
自転車	7
徒歩	0
自家用車	12
タクシー	0
その他	1
バイク	(1)



5.年齢	
10歳代	1
20歳代	0
30歳代	1
40歳代	1
50歳代	4
60歳代	10
70歳代	5
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	21
福山市外	1



知の深化⑤ 心と体の健康

講師：加藤 由美子（作曲家，NHK テレビ体操・ラジオ体操専属ピアニスト）
[演奏協力・*Studio* 歌鈴(かりん)]

日時：2017 年（平成 29 年）10 月 21 日（土） 14:00～15:30

場所：本学 大講義室

本講座のねらい

本講座は「心身ともに健康とは？」という問いに対して、加藤氏が専属ピアニストとして参画している NHK テレビ体操・ラジオ体操での制作エピソードをまじえながら、体の健康について一緒に考え、「音楽」や「笑い」が心の健康に大切だということを、生演奏や実演を交えて体感してもらうワークショップ形式の講演会であった。

ラジオ体操の歴史とエピソード

ラジオ体操は、昭和 3 年に当時の通信省（後に郵政省、かんぽ生命）が、簡易保険発売と同時に、アメリカの保険会社を真似て、満期まで健康で保険料を支払ってもらうように体操をつくり、NHK が協力して放送を開始したのが始まりであった。その後、第二次世界大戦により放送中止となった期間はあったが、再開された体操は、現在まで継続しており、長年にわたり国民になじみのある体操として、また、ニュースや大相撲に次いで長寿番組として親しまれている。

加藤氏は 7 代目専属ピアニストを約 20 年間務めてきており、以前はすべて生放送していたこと、現在の伴奏は 5 代目から 7 代目の専属ピアニスト（いずれも作曲家）3 人で担当していること、平成 29 年 8 月 29 日の北朝鮮ミサイル発射の際は放送中止となってしまったこと、また、放送時間が決まっているので状況に応じて即興演奏するなど時間調整で苦労していること、などのエピソードが紹介された。

心の健康と「笑い」

体の健康には体操が効果的である一方、心の健康には「笑い」が重要であり、加藤氏は落語を使ったオペラ（落語オペラ）も作詞・作曲されている。本講演には、*Studio* 歌鈴の皆さんが協力出演してくださり、落語オペラ『小唄歌』より 1 曲当り 1 ～ 2 分程度の短い楽曲（小唄）3 話が披露され、会場は笑いの渦につつまれた。

そして、講演の最後は、加藤氏の生伴奏により、参加者全員でラジオ体操第一を行なうという、まさに健康的な講演会であった。



加藤氏による講演の様子



加藤氏の生伴奏によるラジオ体操第一

2017年度(平成29年度) 公開講座「心と体の健康」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)10月21日(土) 14:00～15:30

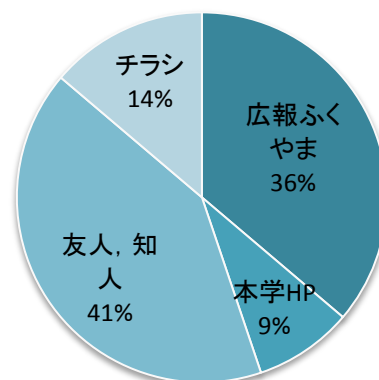
2. 場所 本学 大講義室

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	106	95	81	7	7	76%

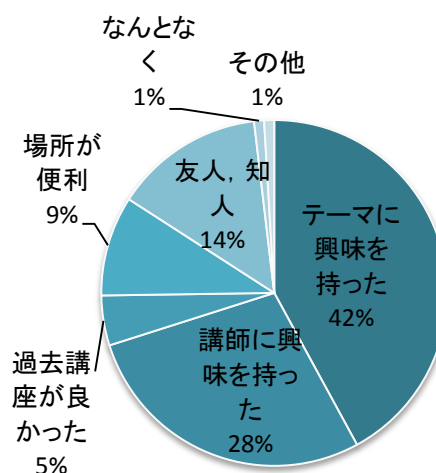
回収(枚)	回収率
68	77%

アンケート項目

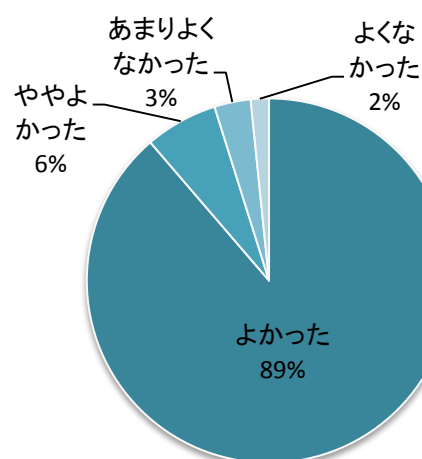
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	21
本学のホームページ	5
友人, 知人	24
公共施設に配布してあるチラシ	8
その他	0



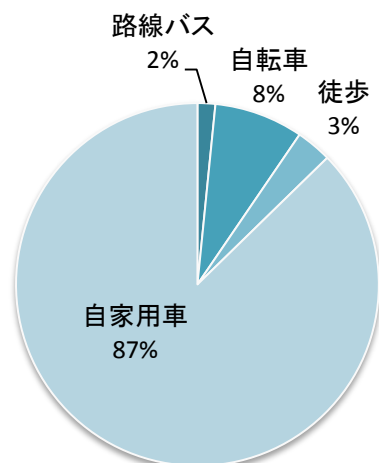
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	45
講師に興味を持ったから	30
過去に受講した講座が良かったから	5
実施場所が便利だから	10
友人, 知人に勧められて	15
なんとなく	1
その他	1
一度, 大学に来たかったから	(1)



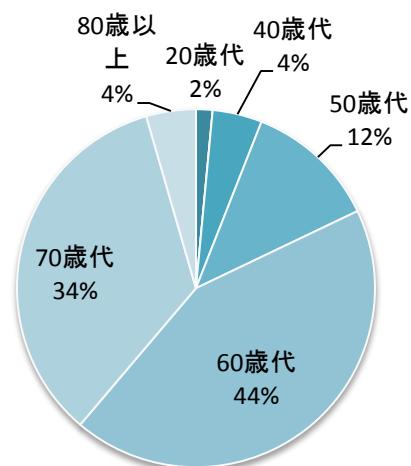
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	55
ややよかった	4
あまりよくなかった	2
よくなかった	1



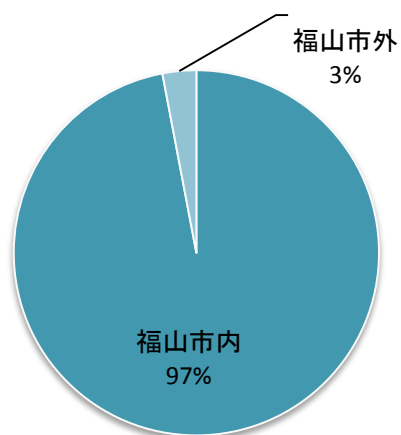
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	1
自転車	5
徒歩	2
自家用車	55
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	1
30歳代	0
40歳代	3
50歳代	8
60歳代	29
70歳代	23
80歳以上	3



6.お住まい	
福山市内	65
福山市外	2



知の深化⑥ 古代の海民と北海道

講師：瀬川 拓郎（旭川市博物館長）

日時：2017 年（平成 29 年）11 月 18 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 大講義室

（講演要旨）

ある日、アイヌの神話・伝説を調べていた私は、思わず目を見張りました。そこには『古事記』『日本書紀』『風土記』の海民伝説と共通するモチーフがいくつもあったのです。

では、なぜ神話・伝説が共通するのでしょうか。なぜ古代海民とアイヌなのでしょう。これまで誰も指摘したことのないこの事実の発見が、二千年を生き抜いた縄文という、予想もしなかった結論へ私を導くことになりました。本講演では、縄文人と日本列島の人びとの成り立ちについて解説した上で、この問題についてお話しをしました。

海の神のサメやシャチが、高山の山頂に坐す山の女神のもとへ往還する—古代海民とアイヌに共通する伝説の一つです。この伝説はかれらの他界観を反映していそうです。というのも、かれらの他界は地下にあり、海辺の洞窟を入口とし、高山山頂を祖霊や神の世界への出口とするからです。つまりこの伝説は、生者である海の神が山頂に坐す亡き妻を訪ねる、他界への往還伝説とみられます。

この気づきは強力な磁場を帯び、さまざまな事実を引き寄せていくことになりました。たとえば、海と山を往還する祖霊や神の世界観、洞窟を他界の入口とする観念は、南島にも存在します。興味深いことに、この同じ他界観を共有する海民、アイヌ、南島の人びとは、縄文習俗のイレズミ、抜歯、縄文人の形質的特徴を弥生時代以降も長くとどめてきました。共通する伝説についても、縄文起源の伝説と考えることができるのではないのでしょうか。

海辺の洞窟と山頂を結ぶ他界伝説は、山形県羽黒山のほか新潟、富山、長野、神奈川、島根など各地の修験道の道場でも語られていました。他界の出口を山頂の沼とする修験者の観念は、アイヌのそれと一致します。かれらもまた縄文の世界観を伝えていたのではないのでしょうか。

農耕民は、山の女神が平地の田畑と山を往還すると考えていました。この二元的な世界観は、海と山の神の往還という縄文の二元的な世界観の構造的な変容であり、海の神を失った山の女神がひとり平地へ往還する存在になったことを意味しているのではないでしょう。山の女神に海魚を供える奇妙な習俗はその名残だとおもわれます。

弥生～古代の海民は、強い呪術性を帯びていたことが考古学的に明らかになってきています。なかには呪術者のト部として古代の王権に仕える者もありました。縄文人の形質的特徴を古墳時代までとどめた南九州の隼人もまた、呪能と芸能によって王権に奉仕しました。強い呪能で注目されたのは古代アイヌも同じです。かれらの呪能と芸能は、海と山、彼岸と此岸を往還して人びとを祝福するまれびと神の世界観、すなわち縄文の世界観に由来するものだったのではないのでしょうか。

本講演では、このような事実や仮説を提示しながら、縄文をキーワードとした日本列島人の成り立ちと、瀬戸内にも拠点があった海民の独自性、山岳信仰の修験者と縄文の関係などについて考えました。

講演終了後には多くのご質問をいただき、縄文、アイヌ、海民といった問題に寄せる参加者の強い関心を感じることができました。

2017年度(平成29年度) 公開講座「古代の海民と北海道」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)11月18日(土) 14:00～15:30

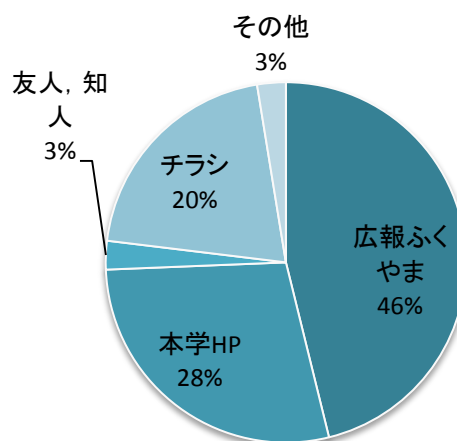
2. 場所 本学 大講義室

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	39	49	32	10	7	82%

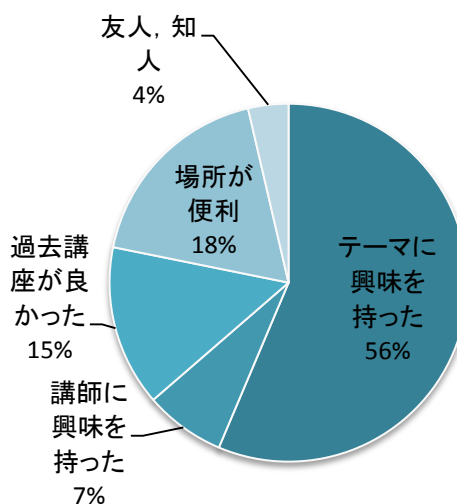
回収(枚)	回収率
34	81%

アンケート項目

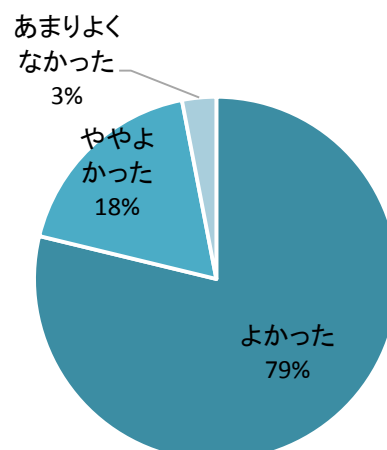
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	18
本学のホームページ	11
友人, 知人	1
公共施設に配布してあるチラシ	8
その他	1



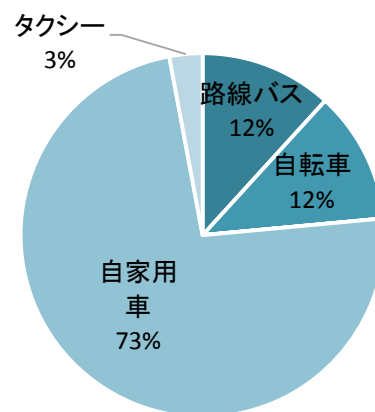
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	31
講師に興味を持ったから	4
過去に受講した講座が良かったから	8
実施場所が便利だから	10
友人, 知人に勧められて	2
なんとなく	0
その他	0



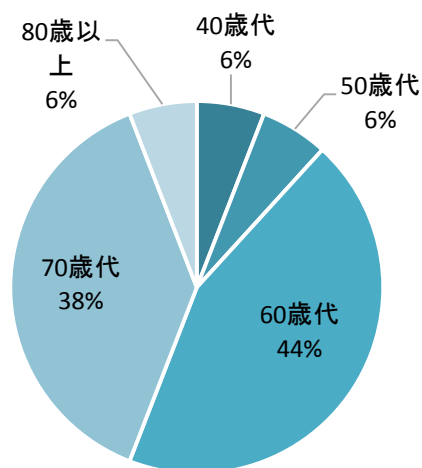
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	26
ややよかった	6
あまりよくなかった	1
よくなかった	0



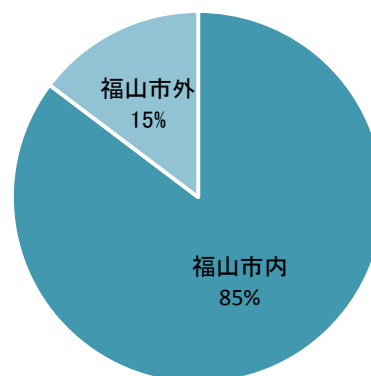
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	4
自転車	4
徒歩	0
自家用車	25
タクシー	1
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	2
50歳代	2
60歳代	15
70歳代	13
80歳以上	2



6.お住まい	
福山市内	29
福山市外	5



知の深化⑦ 冬の夜空の物語

講師：香西 洋樹（鳥取市さじアストロパーク・佐治天文台台長）

日時：2017 年（平成 29 年）12 月 16 日（土） 14：00～15：30

場所：本学 中講義室 A

今回の講師、香西先生は倉敷市ご出身で、長く国立天文台で研究者としてご活躍された。小惑星など多くの新天体を発見され、天体写真の撮影に関する解説書や「シェイクスピア星物語」という著作もある。ご講演の内容は、冬の星空を出発点にして、天文学と哲学との関係や、ギリシャ神話、望遠鏡、宇宙 138 億年の歴史へと広がっていった。ユーモアを交えた語り口で、エピソードもたくさん盛り込まれ、幅広い教養に裏打ちされた魅力溢れる内容に、一般市民はもとより聴講した学生たちも大きな刺激を得たようだった。

本学の学生が寄せた以下の感想文から当日の講演の様子をご想像いただきたい。

私は普段、夜にふと空を見上げて、今日は星がたくさん出ているから明日は晴れそうだなと思う程度で、今まであまり意識して星などを観察したことがなかった。しかし、今日の香西先生のお話を聞いて、天文学に魅力やおもしろさを感じることができた。

よく小学校などで歌われる「きらきら星」の星は、空気が移動することで星の光が右や左へ動き、それがきらきら光って見えるということを知った。このきらきら星は瀬戸内海では少ないそうだ。また、オリオン座の 3 つ連なっている下にある星は、小さい星がたくさん生まれるところであると知り、星の誕生についてのイメージを膨らませることができた。そして、私の 1 番興味関心を引いたのは、“宇宙には果てがあるのか”という話題であった。それを聞いたときは、「宇宙」というものが壮大なもの過ぎて、果てがあるのかどうなのかイメージが湧いてこなかった。宇宙といえば、真っ黒な世界に惑星や星などがたくさんあるのを想像するが、そこには光が存在していて、光というのは常に膨張し続けている。その光が膨張するところに追いつくか追いつかないかで、宇宙の果てがあるのかが決まる。どこを見ても果てが見えるのだが、実際にはその果てというのは遮られて光が見えるのだ。最初はイメージできなかったが、宇宙の果てには、光が大きく関係していることがわかった。

1 等星というのは、ほとんどが冬に見られるということも知った。夏と冬の夜空の違いもあまり把握していなくて、目で見ただけではどれが 1 等星なのかははっきりとは分からないので、これから意識して夜空を見て星を観察してみたいと思った。そして、遠くの地点まで見えるのは夜で、星が見えるのは夜だからであるということも改めて知った。これはよく考えてみれば当たり前のことのように思えるが、こういった当たり前のことを説明できるようにしておきたいと思った。逆に昼は太陽や教室の電気などの光に反射しているものを見ている。目に映っているものが、光に反射しているものというのはなんだか変な感じがするが、しっかりと将来児童に教えられるようにしたい。香西先生が最後に教えて下さった、星・太陽・月はなぜ丸いかについては平松先生の授業で原理を学習していたので、よく理解することができた。これはシャボン玉と同じ原理で、球にすることで表面積を最小にし、体積を最大にしているのである。身近にあるシャボン玉で考えるとよくわかるなと思った。

今日の講義の内容は、自分の中で全部理解できたというわけではないのだが、天文学という分野にとっても興味を持つことができた。香西先生のお話の中で、“シェイクスピア”という人物の名前がたくさん出てきた。

私は名前だけ知っていて、何をした人なのかをあまり知らないなので、今回をきっかけにシェイクスピアにまつわる本を探して読んでみたいと思った。天文学のお話だけでなく、様々な話題をお話しして下さったので、聞いていてとてもためになり、自分の中の知識が増え、さらに頭の中の星や宇宙に関しての世界観を広げることができた。（福山市立大学 教育学部 3 年 H.U. さんによる感想文）

2017年度(平成29年度) 公開講座「冬の夜空の物語」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)12月16日(土) 14:00～15:30

2. 場所 本学 中講義室A

3. 参加者

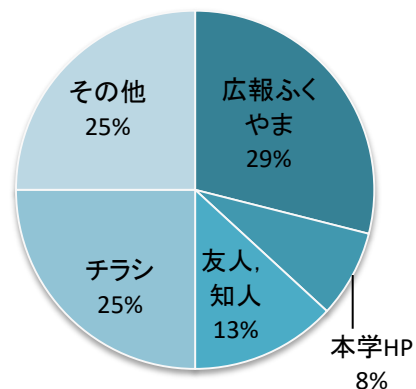
事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
		事前申込	当日申込	スタッフほか	
90	75	71	0	4	79%

4. アンケート集計結果

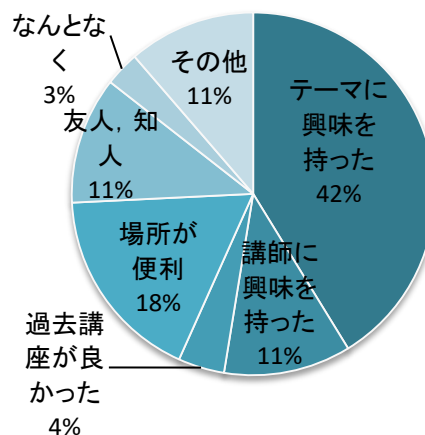
回収(枚)	回収率
65	92%

アンケート項目

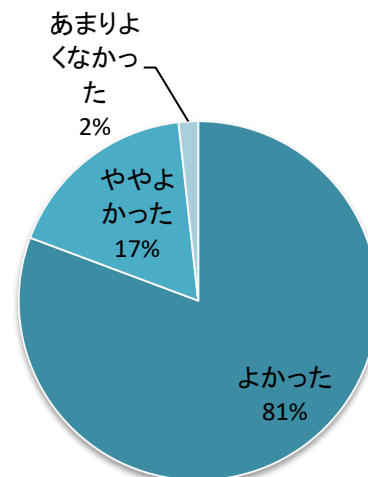
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	22
本学のホームページ	6
友人, 知人	10
公共施設に配布してあるチラシ	19
その他	19
大学の先生から	(18)
高校の担任の先生から	(1)



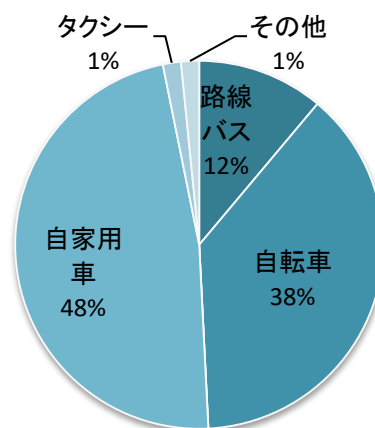
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	40
講師に興味を持ったから	11
過去に受講した講座が良かったから	4
実施場所が便利だから	17
友人, 知人に勧められて	11
なんとなく	3
その他	11
授業だから	(10)
大学の様子を見てみたいから	(1)



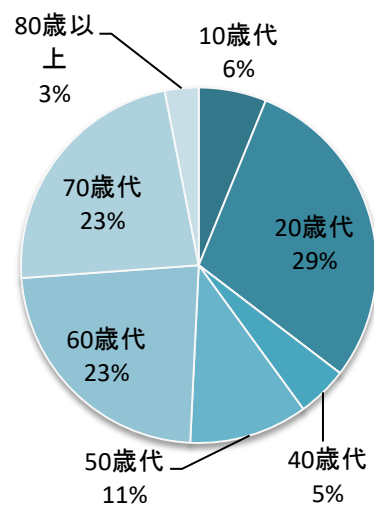
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	46
ややよかった	10
あまりよくなかった	1
よくなかった	0



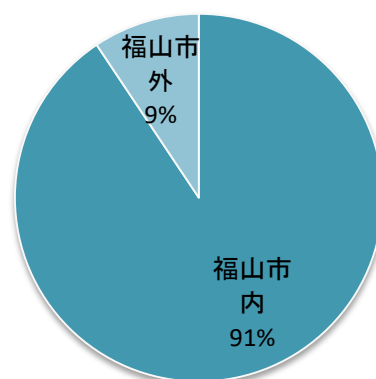
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	7
自転車	24
徒歩	0
自家用車	30
タクシー	1
その他	1
電車	(1)



5.年齢	
10歳代	4
20歳代	19
30歳代	0
40歳代	3
50歳代	7
60歳代	15
70歳代	15
80歳以上	2



6.お住まい	
福山市内	58
福山市外	6



4 ふくやまサイエンスフェスティバル

[illegible]

2017 ふくやまサイエンスフェスティバル

日時：2017 年（平成 29 年）9 月 30 日（土） 10：00～15：00

場所：本学 港町キャンパス中庭

主催：福山市立大学教育研究交流センター

ふくやまサイエンスフェスティバル実行委員会

協賛：株式会社エフピコ 株式会社ハローズ 福山ガス株式会社 ホーコス株式会社

協力：広島大学附属福山中・高等学校天文地学クラブ 福山市立小学校教員

福山市立福山中・高等学校自然科学部 福山都市圏交通円滑化総合計画推進委員会

後援：NHK 広島放送局 中国放送 テレビ新広島 広島テレビ 広島ホームテレビ エフエムふくやま

朝日新聞福山支局 産経新聞福山支局 山陽新聞社 中国新聞備後本社 毎日新聞福山支局

読売新聞福山支局 福山市教育委員会（順不同）

5 回目を迎えるサイエンスフェスティバルは、参加型の実験ブースと協賛企業によるデモンストレーションおよび屋外ステージでのサイエンスショーという 3 本立てで構成された。

実験ブースは①葉っぱのガイコツ ②ストロー笛をつくろう ③スライムで遊ぼう ④消える水玉?! ⑤ふしぎなメガネ ⑥ミニ実験パーク ⑦福山の大地ができるまで ⑧備後のCO₂削減『ベスト運動』、以上 8 テントで実施された。

地元企業企画としてはホーコス(株)による「精密機械のデモンストレーション」、福山ガス(株)と(株)ハローズの 2 社共同による「低温貯蔵のイモをくらべよう」、(株)エフピコによる「プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう」の 3 展示が披露された。

サイエンスショーのステージでは、進悦子さん（愛媛県総合科学博物館学芸員）による「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」と永田寿春さん（北陸電力エネルギー科学館）による「30 分でんき実験クイズバトル」がそれぞれ、午前午後 1 回ずつ、合計 4 回行われ、好評を博した。

サイエンスショーの間には本学吹奏楽部による演奏が披露されて、子ども達がうれしそうに耳を傾けていた。ステージのスケジュールは次の通りである。

10：00 開会式

10：10 サイエンスショー「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」

11：00 サイエンスショー「30 分でんき実験クイズバトル」

12：20 吹奏楽部演奏

13：00 サイエンスショー「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」

14：00 サイエンスショー「30 分でんき実験クイズバトル」

お土産グッズを受け取ることができるブースでは、順番待ちの列ができて若干滞る状態が生じることはあったが、大きな混雑もなく子ども達は楽しんでいるようであった。



会場全体の様子



実行委員長のあいさつ



吹奏楽部の演奏



サイエンスショー
「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」



サイエンスショー
「30分でんき実験クイズバトル」



プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう



精密機械のデモンストレーション



低温貯蔵のイモをくらべよう



消える水玉？！



ふしぎなメガネ



ストロー笛をつくろう



葉っぱのガイコツ



スライムで遊ぼう



備後のCO₂削減『ベスト運動』



福山の大地ができるまで



ミニ実験パーク



閉会のあいさつ

天候にも恵まれて、約1,100人の子ども達が参加し、楽しい時間を過ごしたようである。

小学校、中学校、高等学校の先生や生徒さんのほか、地元企業の方々に質の高い実験ブースを出していたうえ、地元企業各社に協賛していただき、今年も成功裡に終了することが出来た。ご支援とご協力を賜った関係者の皆様には心よりお礼を申し上げます。

2017年度 ふくやまサイエンスフェスティバル 開催アンケート 結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)9月30日(土) 10:00～15:00

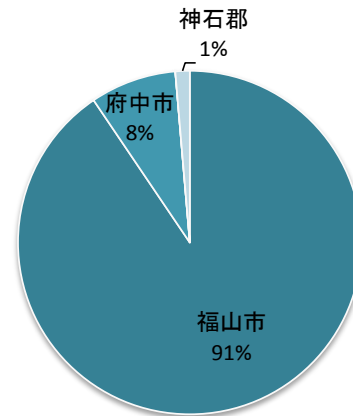
2. 場所 本学 福山市立大学港町キャンパス中庭および県有地

3. 参加者	全体参加(人)	大人	子ども	※みなと町公園からの入場を含む
	1100	500	600	

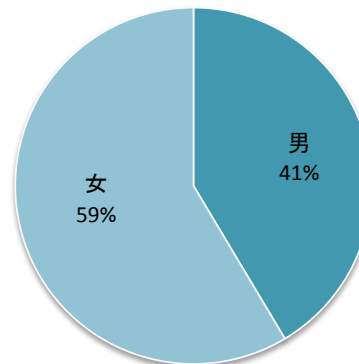
4. アンケート集計結果	回収(枚)	回収率
	73	12%

アンケート項目

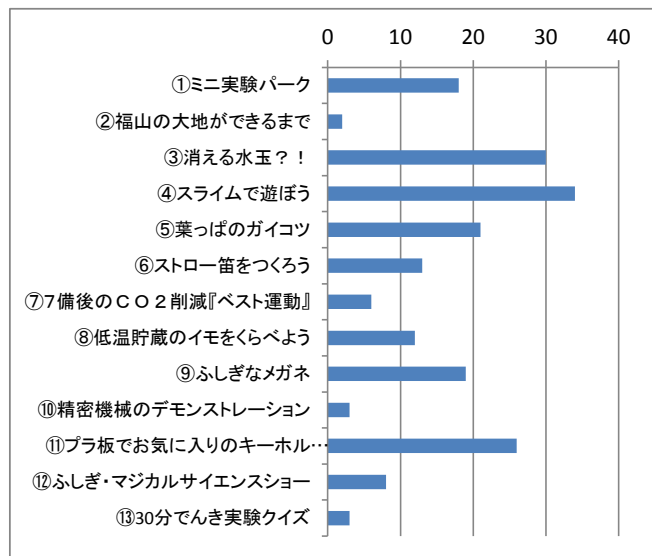
1. 住んでいるところを教えてください	
福山市	67
府中市	6
尾道市	0
笠岡市	0
神石郡	1



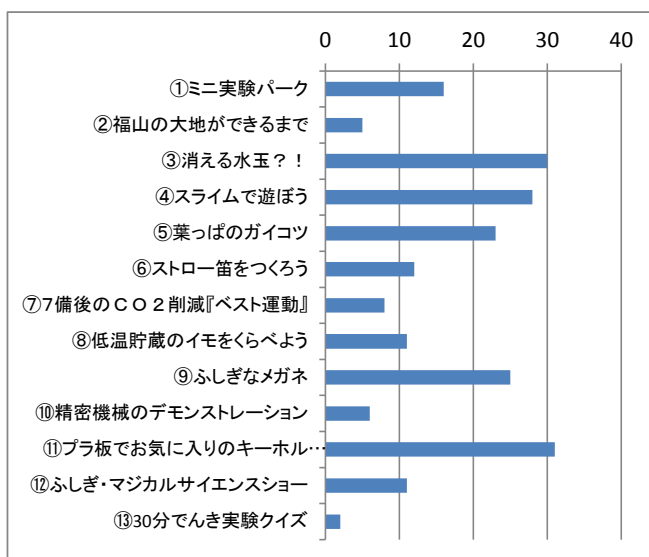
3. 男の子・女の子	
男	29
女	41



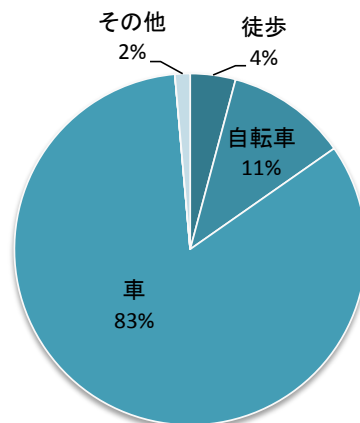
4. 何を楽しみに来しましたか。 (あてはまるものに3つマルをつけてください)	
①ミニ実験パーク	18
②福山の大地ができるまで	2
③消える水玉?!	30
④スライムで遊ぼう	34
⑤葉っぱのガイコツ	21
⑥ストロー笛をつくろう	13
⑦7備後のCO2削減『ベスト運動』	6
⑧低温貯蔵のイモをくらべよう	12
⑨ふしぎなメガネ	19
⑩精密機械のデモンストレーション	3
⑪プラ板でお気に入りのキーホルダーを作る	26
⑫ふしぎ・マジカルサイエンスショー	8
⑬30分でんき実験クイズ	3



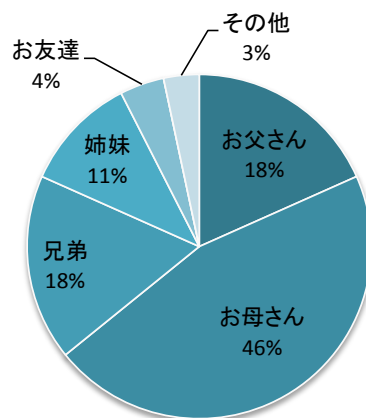
4-2. 特に面白かったものは。 (あてはまるものの番号を3つかいてください)	
①ミニ実験パーク	16
②福山の大地ができるまで	5
③消える水玉？！	30
④スライムで遊ぼう	28
⑤葉っぱのガイコツ	23
⑥ストロー笛をつくろう	12
⑦7備後のCO2削減『ベスト運動』	8
⑧低温貯蔵のイモをくらべよう	11
⑨ふしぎなメガネ	25
⑩精密機械のデモンストレーション	6
⑪プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう	31
⑫ふしぎ・マジカルサイエンスショー	11
⑬30分でんき実験クイズ	2



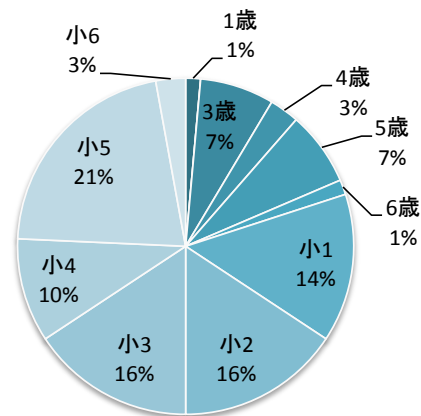
5. 交通手段(複数回答)	
徒歩	3
自転車	8
車	60
バス	0
電車	0
バイク	0
その他	1
タクシー	(1)



6. 誰と一緒に来ましたか(複数回答)	
お父さん	22
お母さん	55
兄弟	21
姉妹	13
お友達	5
ひとり	0
その他	4
祖父母	(4)



2. 学年		
1歳		1
2歳		0
3歳		5
4歳		2
5歳		5
6歳		1
小1		10
小2		11
小3		11
小4		7
小5		15
小6		2
その他		0



子どもの通う学校等名

小学校		幼稚園		保育所	
旭(府中)	2	かなりや	1	ぎんがの郷	1
旭丘	2	高島	1	宜山	1
網引	1	天使	3	宜山ひかり	1
伊勢丘	1	こども園		上下(府中)	1
大津野	1			高屋	1
春日	1	ゆめな	2		
霞	2				
川口	1				
川口東	3				
ぎんがの郷	1				
栗生(府中)	1				
来見(神石高原町)	1				
桜丘	4				
樹徳	1				
上下南(府中)	2				
瀬戸	2				
多治米	3				
手城	3				
戸手	1				
西深津	1				
東	5				
光	1				
引野	1				
久松台	2				
日吉台	4				
深津	2				
松永	1				
御幸	2				
山手	1				
湯田	1				

市外及び県外の学校等

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

5 ワークショップ実施報告書

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

2017 ふくやまサイエンスフェスティバル

日時：2017 年（平成 29 年）9 月 30 日（土） 10：00～15：00

場所：本学 港町キャンパス中庭

主催：福山市立大学教育研究交流センター

ふくやまサイエンスフェスティバル実行委員会

協賛：株式会社エフピコ 株式会社ハローズ 福山ガス株式会社 ホーコス株式会社

協力：広島大学附属福山中・高等学校天文地学クラブ 福山市立小学校教員

福山市立福山中・高等学校自然科学部 福山都市圏交通円滑化総合計画推進委員会

後援：NHK 広島放送局 中国放送 テレビ新広島 広島テレビ 広島ホームテレビ エフエムふくやま

朝日新聞福山支局 産経新聞福山支局 山陽新聞社 中国新聞備後本社 毎日新聞福山支局

読売新聞福山支局 福山市教育委員会（順不同）

5 回目を迎えるサイエンスフェスティバルは、参加型の実験ブースと協賛企業によるデモンストレーションおよび屋外ステージでのサイエンスショーという 3 本立てで構成された。

実験ブースは①葉っぱのガイコツ ②ストロー笛をつくろう ③スライムで遊ぼう ④消える水玉?! ⑤ふしぎなメガネ ⑥ミニ実験パーク ⑦福山の大地ができるまで ⑧備後のCO₂削減『ベスト運動』、以上 8 テントで実施された。

地元企業企画としてはホーコス(株)による「精密機械のデモンストレーション」、福山ガス(株)と(株)ハローズの 2 社共同による「低温貯蔵のイモをくらべよう」、(株)エフピコによる「プラ板でお気に入りのキーホルダーを作ろう」の 3 展示が披露された。

サイエンスショーのステージでは、進悦子さん（愛媛県総合科学博物館学芸員）による「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」と永田寿春さん（北陸電力エネルギー科学館）による「30 分でんき実験クイズバトル」がそれぞれ、午前午後 1 回ずつ、合計 4 回行われ、好評を博した。

サイエンスショーの間には本学吹奏楽部による演奏が披露されて、子ども達がうれしそうに耳を傾けていた。ステージのスケジュールは次の通りである。

10：00 開会式

10：10 サイエンスショー「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」

11：00 サイエンスショー「30 分でんき実験クイズバトル」

12：20 吹奏楽部演奏

13：00 サイエンスショー「ふしぎ・マジカルサイエンスショー」

14：00 サイエンスショー「30 分でんき実験クイズバトル」

お土産グッズを受け取ることができるブースでは、順番待ちの列ができて若干滞る状態が生じることはあったが、大きな混雑もなく子ども達は楽しんでいるようであった。

2017年度(平成29年度) ワークショップ「ふくやまの伝統芸能「二上りおどり」」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)7月29日(土) 10:30～12:00

2. 場所 本学 実技演習室

3. 参加者

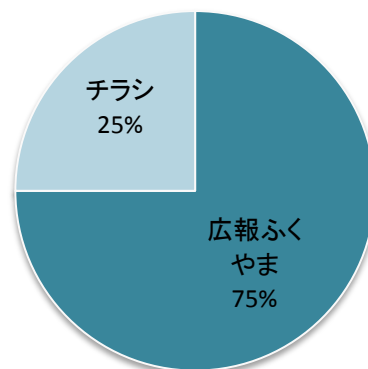
事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
		事前申込	当日申込	スタッフほか	
5	7	5	0	2	100%

4. アンケート集計結果

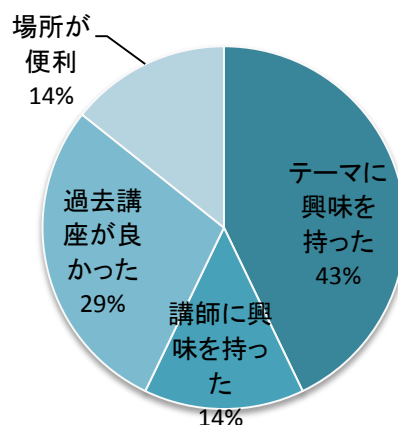
回収(枚)	回収率
5	100%

アンケート項目

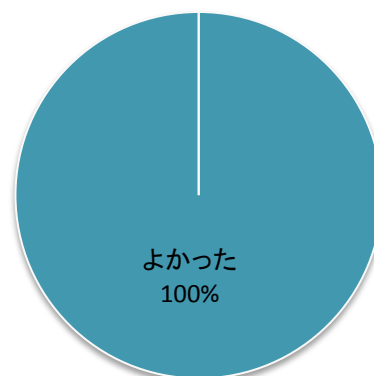
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	3
本学のホームページ	0
友人, 知人	0
公共施設に配布してあるチラシ	1
その他	0



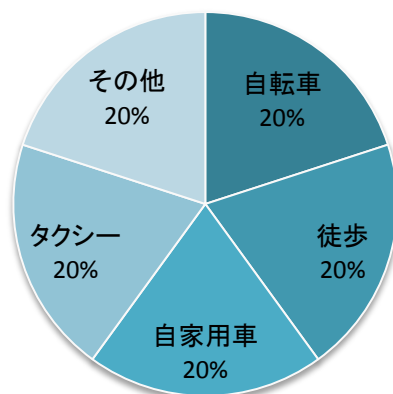
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	3
講師に興味を持ったから	1
過去に受講した講座が良かったから	2
実施場所が便利だから	1
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0
その他	0



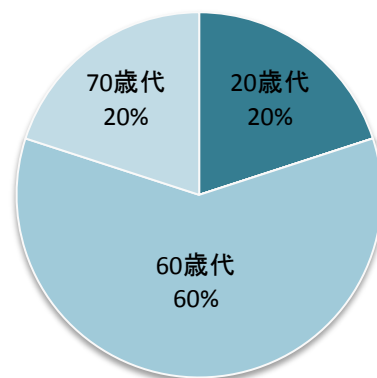
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	5
ややよかった	0
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



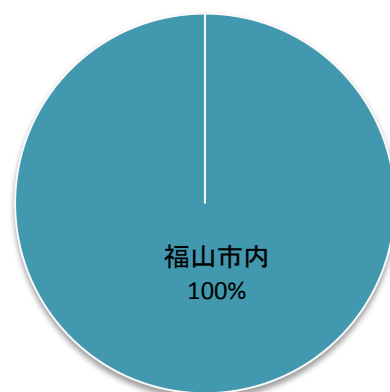
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	1
徒歩	1
自家用車	1
タクシー	1
その他	1
バイク	(1)



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	1
30歳代	0
40歳代	0
50歳代	0
60歳代	3
70歳代	1
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	5
福山市外	0



まちをつくろうワークショップ ― 広場の模型を作る ―

講師： 高橋美佳（本学非常勤講師）

日時：2017 年（平成 29 年）8 月 6 日（日） 13：30～17：00

場所：本学 小講義室 B

ワークショップの目的

現在、福山市の中心市街地、特に商店街やその周辺に空き地が増加している。空き地はそのまま駐車場に活用されることが多く、中心市街地の駐車場対策にはなっているものの、街の連続した景観を損ない、本来賑わいを出さなければならない商業地の雰囲気損ねている。そのようなまちの問題を、小中高生から一般の大人まで、誰でも作れる簡単な広場の模型を作ることにより楽しみながら感じてもらい、有効活用の方策を考えてもらうことを目的とした。

ワークショップの内容

課題の想定敷地を実際の商店街沿いにある 320 m²ほどの空き地に設定し、そこに次の建物が建つ間の期間限定でどのような使い方ができるかを考えてもらった。最初に、中心市街地に空き地が増えている状況の写真を見せて簡単に解説した。次に、設定された空き地にどんな使い方ができるか、思いつくキーワードを紙にたくさん書いてもらった。とにかく何も考えずに、恥ずかしがったり難しく考えたりしないで、思いつくキーワードをラフに全部書いてもらう。これが柔軟な思考でアイデアを出すために、とても重要だと思っている。あらかじめ敷地図を貼り付けたスチレンボードを用意し、1/50 の模型になるので縮尺について説明した。そして特に設計図や模型の作り方などは指導せずに、いきなり自分で作ってもらった。そのいきなりが初期段階はとても大事だと思っている。何も無い白紙に、とにかく自分の考えで線を一本引き取っ掛けを作る。そこから形を立ち上げていく。それをあれこれ先に指導し手助けすると、取っ掛けを自分で見つける力が養われない。材料は、色画用紙や絵の具、紙粘土の他、建築模型で良く使う 1/50 の人物、樹木用のかすみ草、芝生シート他様々なものを揃え、参加者に自由に選んで作ってもらった。

ワークショップの様子

小学生とその家族、高校生、昨年のワークショップに参加していた中学生もいた。親子での参加者は親子で相談しながら一緒に作っていた。敷地の白いボードに、最初に何も指導しなくても作れるか少し心配したが、各々必要に応じて線を描き、材料を選んで置いてみたりして、徐々に自分で取っ掛けを見つけ模型を作っていった。出来上がった模型は、防災公園やシェルターのようなもの、商店街沿いなので買い物帰りに立ち寄れる花壇のある広場や屋台の並ぶマルシェ、野菜栽培タワーやラビットランカフェなどもあり、最初のうちは手助けもアドバイスもしなかったが、各々自由な発想で形や配置を考え材料を使い模型を作っていた。

ワークショップの感想

アンケートに「自分ではなかなか手に入れることがない材料がたくさんあってうきうきでした。」「初めはとまどったけれど楽しかったです。」などの感想があったので、おおむね喜んで作っていたと思う。



ワークショップの様子



模型製作



作品

2017年度(平成29年度) ワークショップ「まちをつくろうワークショップ ～ 広場の模型を作る ～」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)8月7日(日) 13:30～17:00

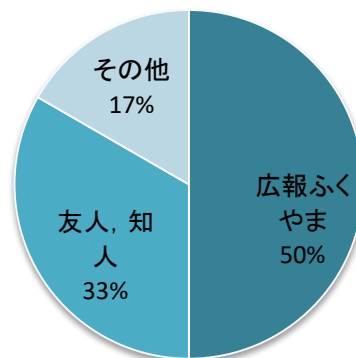
2. 場所 本学 小講義室B

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	7	8	7	0	1	100%

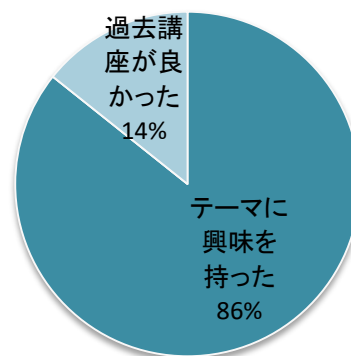
回収(枚)	回収率
6	86%

アンケート項目

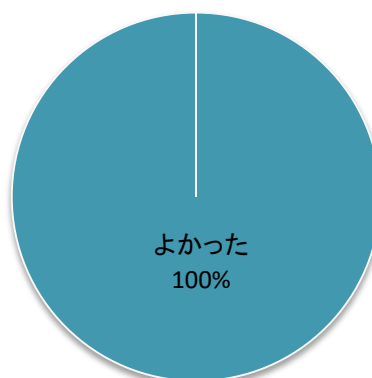
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	3
本学のホームページ	0
友人, 知人	2
公共施設に配布してあるチラシ	0
その他	1
学校の掲示板	(1)



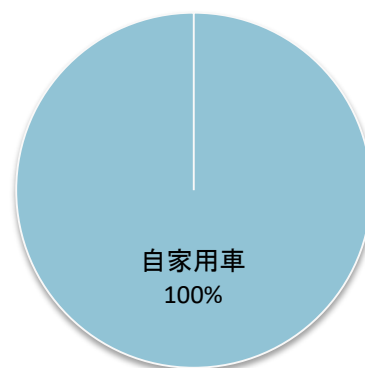
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	6
講師に興味を持ったから	0
過去に受講した講座が良かったから	1
実施場所が便利だから	0
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0
その他	0



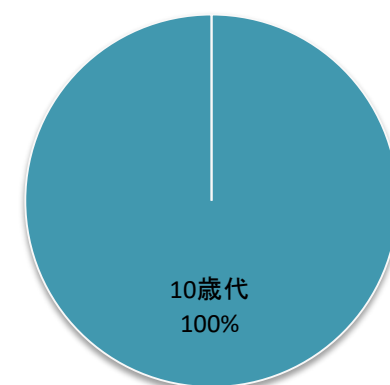
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	6
ややよかった	0
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



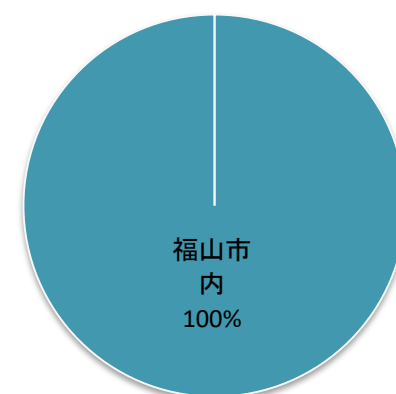
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	0
徒歩	0
自家用車	6
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	6
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	0
50歳代	0
60歳代	0
70歳代	0
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	6
福山市外	0



日本の伝統文化「こぎん刺繍」の理解と技術の伝承

講師：山本 百合子（本学非常勤講師）

日時：2017 年（平成 29 年）9 月 7 日（木）、14 日（木）、28 日（木） 10：00～12：00

場所：本学 図画工作室

1. 講座の目的

日本の労働着から始まった伝統的な刺繍の一つである「こぎん刺繍」（発祥は津軽地方）を少しでも多くの人に知っていただき、手作りすることの「すばらしさ」、「完成の喜び」、「飾る楽しさ」などの体験を通して、一針一針刺すことにより心豊かな時間を過ごしてもらうことを目的としています。また、手・指を動かすことは子どもにとっては脳の発達を促し、高齢者にとっては脳の活性化にも役立つと言われています。その意味からもこの講座が役立てばと思います。

2. 講座の内容

こぎん刺繍の技法を用いて、テーブルセンター（袋物・ランチョンマット・クッション等）を製作する。

- ① 第 1 日目 刺繍の種類と歴史について。こぎん刺繍について。
材料・図案化の方法と配置について。
こぎん刺繍の基礎技法について実習。
- ② 第 2 日目 テーブルセンター等の製作。
- ③ 第 3 日目 縁かがり・その他様々な始末の仕方について。
完成



講座風景

3. まとめ

同様な講座を過去、短期大学で 8 回、市立大学で 2012 年に 3 回開講致しました。その後私の定年退職に伴い終了となっておりましたが大学側の開講要請を頂き、再開いたしまして 2 回目です。今回も多くの方の希望を頂き嬉しい結果でした。

一部苦戦された方もいらっしゃったようですが、多くの方はそれぞれ自分なりの図案で楽しく過ごしてくださった様子で、作品もクッション、テーブルセンター、タピストリーと、工夫を凝らしてできあがり喜んでおられました。講座修了後のアンケート結果、ほとんどの方から「満足・楽しかった・今後も続けたい等」の意見を頂き、日本の伝統文化の継承と皆様の楽しみ・生き甲斐に少しでも貢献できたのではないかと満足しています。来年度も機会を頂けるのであれば抽選漏れで受講できなかった方々のためにも開講したいと思っております。



完成作品

2017年度(平成29年度) ワークショップ「日本の伝統文化「こぎん刺繍」の理解と技術の伝承」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)9月7日(木), 14日(木), 28日(木) 10:00~12:00

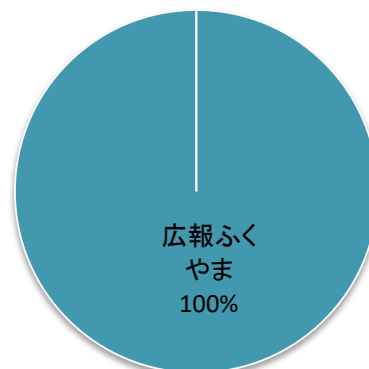
2. 場所 本学 図画工作室

3. 参加者	事前申込(人)	参加(人)	※最終日の人数			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	12	11	10	0	1	83%

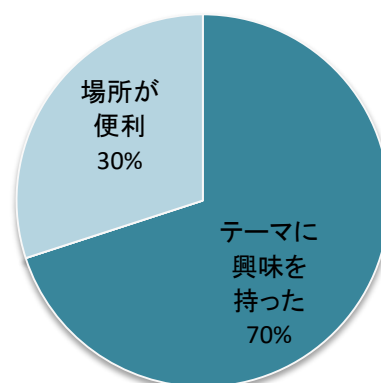
4. アンケート集計結果	回収(枚)	回収率
	7	70%

アンケート項目

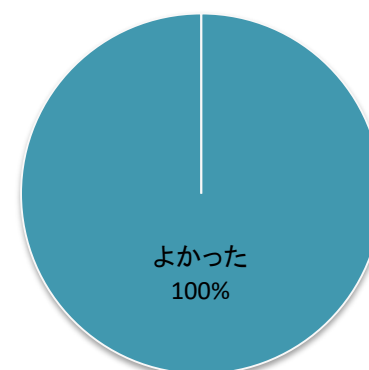
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	6
本学のホームページ	0
友人, 知人	0
公共施設に配布してあるチラシ	0
その他	0



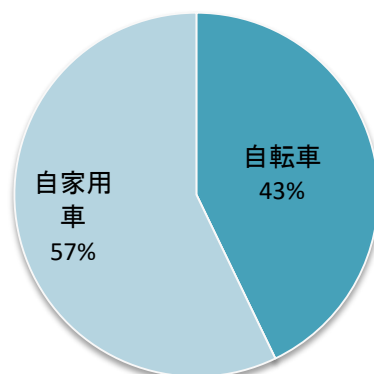
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	7
講師に興味を持ったから	0
過去に受講した講座が良かったから	0
実施場所が便利だから	3
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0
その他	0



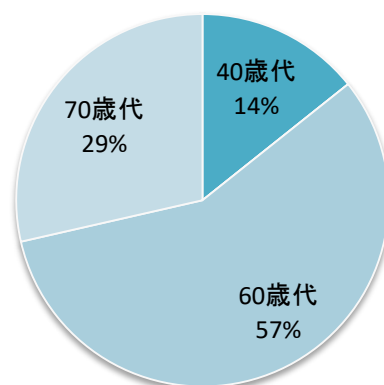
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	7
ややよかった	0
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



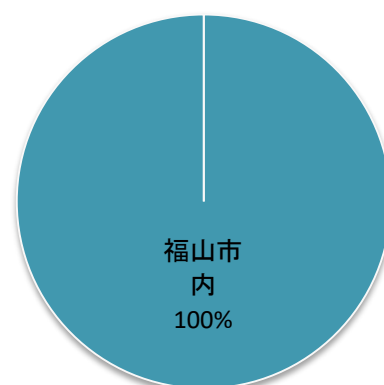
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	3
徒歩	0
自家用車	4
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	1
50歳代	0
60歳代	4
70歳代	2
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	7
福山市外	0



ヨガ

講師：西崎 裕美（本学非常勤講師）

日時：2017 年（平成 29 年）10 月 7 日（土）、21 日（土） 11：00～12：30

場所：本学 実技演習室

ヨガについて

ヨガの起源は、約 4500 年前のインダス文明がはじまりといわれています。インドから世界各国へと広がり、日本にヨガが伝わったのは平安時代の頃、当時「ユガ」と呼ばれ、瞑想を中心とした内容でした。現在は、身体を整えるポーズ、気の流れを調整する呼吸法、心のバランスを保つ瞑想によって構成されるハタヨガが広まっており、多くの人々が美容や健康などのために行っています。

講座の目的

ヨガとは、サンスクリット語で「繋がり」を意味します。心と体、魂が繋がっている状態のことを表します。

一番に気持ち良く体が動かしているか、無理をしていないかどうか、自身に意識を向けること。動いている中においては、自分の身体の癖や歪みにも気付きを持つこと。深い呼吸によるリラックスを味わい、静かなリラクゼーションと瞑想で、心と体への繋がりを感じる。

講座内容

ヨガについて（歴史・注意点）、体の状態確認

ヨガにおける体の使い方、呼吸法

ウォーミングアップ、各ポーズ（仰向け、座位、四つん這い、立位、約 4 種ずつ）

リラクゼーション、瞑想（1 回目・2 回目同様）

まとめ

初めてヨガを行う方がほとんどでした。日々特に動いていない方が大半、ということで、体を動かす心地良さを感じ、呼吸法や瞑想で心に平穏がもたらされるよう、わかりやすくゆっくりと伝えていきました。

この機会に、体を動かすきっかけをつかんでいただきたいと思いました。

集まった皆さんで会話をしながら、楽しんで取り組まれていました。



講座の様子

2017年度(平成29年度) ワークショップ「ヨガ」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)10月7日(土) 11:00～12:30

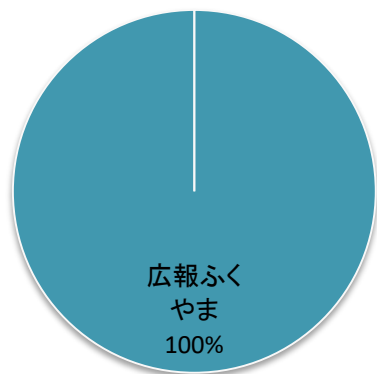
2. 場所 本学 実技演習室

参加者	事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
			事前申込	当日申込	スタッフほか	
	12	8	7	0	1	58%

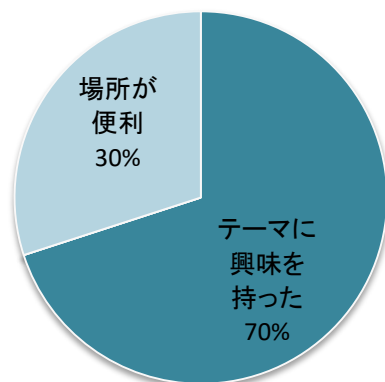
回収(枚)	回収率
7	100%

アンケート項目

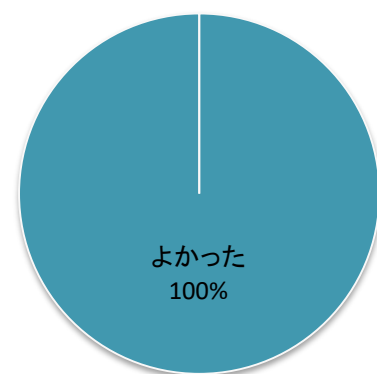
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	6
本学のホームページ	0
友人, 知人	0
公共施設に配布してあるチラシ	0
その他	0



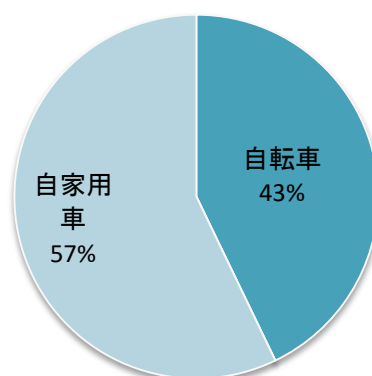
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	7
講師に興味を持ったから	0
過去に受講した講座が良かったから	0
実施場所が便利だから	3
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0
その他	0



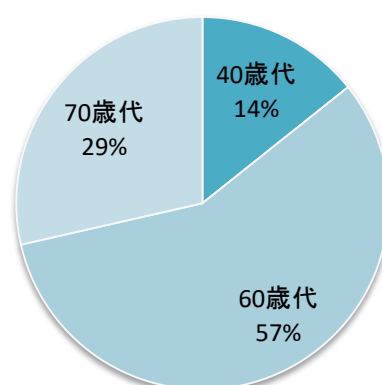
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	7
ややよかった	0
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



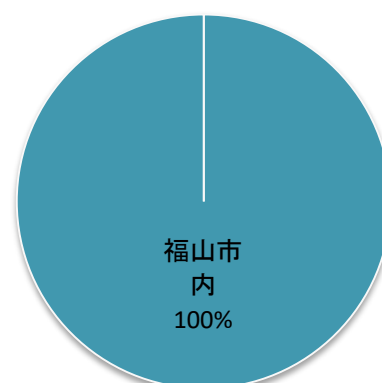
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	3
徒歩	0
自家用車	4
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	1
50歳代	0
60歳代	4
70歳代	2
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	7
福山市外	0



2017年度(平成29年度) ワークショップ「ヨガ」 開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)10月21日(土) 11:00～12:30

2. 場所 本学 実技演習室

3. 参加者

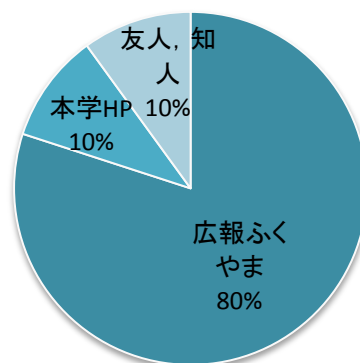
事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
		事前申込	当日申込	スタッフほか	
11	11	10	0	1	91%

4. アンケート集計結果

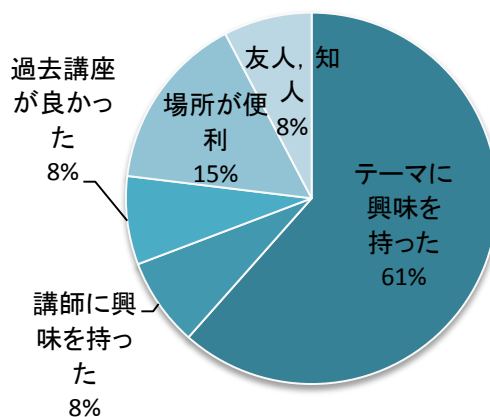
回収(枚)	回収率
10	100%

アンケート項目

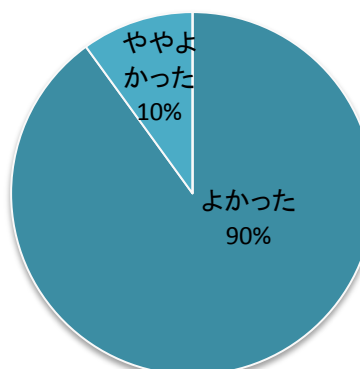
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	8
本学のホームページ	1
友人, 知人	1
公共施設に配布してあるチラシ	0
その他	0



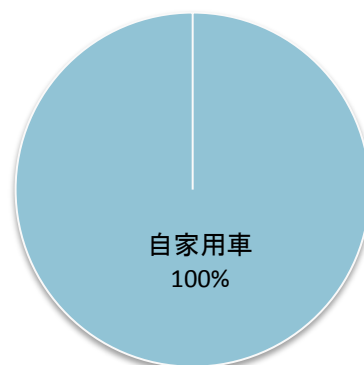
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	8
講師に興味を持ったから	1
過去に受講した講座が良かったから	1
実施場所が便利だから	2
友人, 知人に勧められて	1
なんとなく	0
その他	0



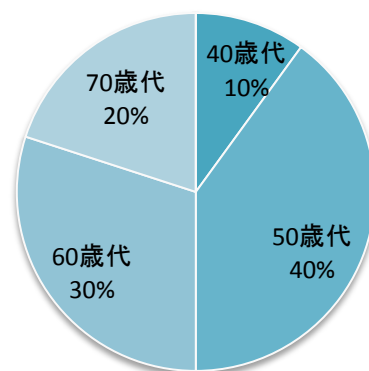
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	9
ややよかった	1
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



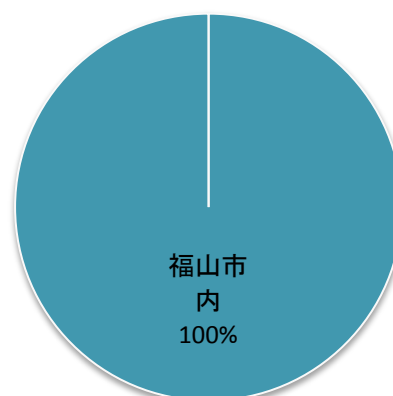
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	0
徒歩	0
自家用車	9
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	1
50歳代	4
60歳代	3
70歳代	2
80歳以上	0



6.お住まい	
福山市内	10
福山市外	0



中国の食文化体験 ― 水餃子作り

講師：張 治清（本学非常勤講師）
劉 郷英（本学教育学部教授）

日時：2017 年（平成 29 年）11 月 3 日（金） 9：00～14：00

場所：本学 家庭科調理室

11 月 3 日文化の日に、本学中国人の張治清、劉郷英両先生を講師として、ワークショップ「中国の食文化体験 ― 水餃子作り」が開催されました。下は 7 歳から上は 90 歳に至るまで、合計 17 名の市民が参加しました。ワークショップの中で講師が中国本場の水餃子の作り方についてレシピを使って教えながら、餃子作りの中国文化について詳細に説明し、参加者たちは餃子作りの楽しい雰囲気をたっぷりと体験しました。

参加者の声から、本ワークショップの楽しさが伺えます。

- ・先生が温かく指導され、素晴らしかった。
- ・作り方を分かりやすく教えていただき、本当に美味しかったです。
- ・丁寧な指導で分かりやすく、初めてでも作れたので良かったです。
- ・中国の文化や料理など、色々と知る機会ができて良かったです。
- ・先生がとても良い方で教え方もよく分かった。
- ・中国の文化についても先生からたくさん聞くことができてとても良かったです。事前の準備をきっちりしてくださっており、本当にありがたかったです。
- ・餃子の餡は下味を付けた状態で作ってありました。皮は伸ばしても破れない柔軟な生地ができており、皮を伸ばす、餡を包むという楽しさ、自分で作ったものを味わう嬉しさ…楽しい時間をありがとうございました。先生方の雰囲気もとても良かったです。
- ・餃子の作り方だけではなく、中国の文化も知ることができて良かったです。美味しかったです。
- ・水餃子が美味しかったこと、作り方が分かったことはもちろんですが、中国の文化について色々教わることができ、色々な世代の人たちと交流できて大変良かったです。
- ・今まで水餃子を全く作りませんでしたが、大変美味しくいただきました。餃子の皮は作るのではなく市販のものを買っていましたが、生の皮を作りたいへん勉強になりました。また、先生の勉強をさせていただき、ありがとうございました。
- ・ワークショップは 3 度目ですが、本日は一番メンバーが良く、楽しくできました。



皮を伸ばす様子



餡を包む様子



出来上がった餃子

2017年度(平成29年度) ワークショップ「中国の食文化体験 ― 水餃子作り」開催結果報告

1. 日時 2017年(平成29年)11月3日(金) 9:00～14:00

2. 場所 本学 家庭科調理室

3. 参加者

事前申込(人)	参加(人)	参加内訳			参加率
		事前申込	当日申込	スタッフほか	
18	17	14	0	3	78%

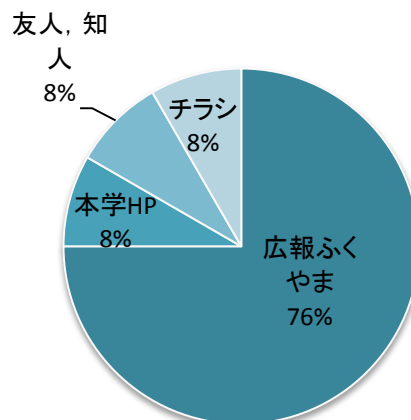
※小学生1人を含む

4. アンケート集計結果

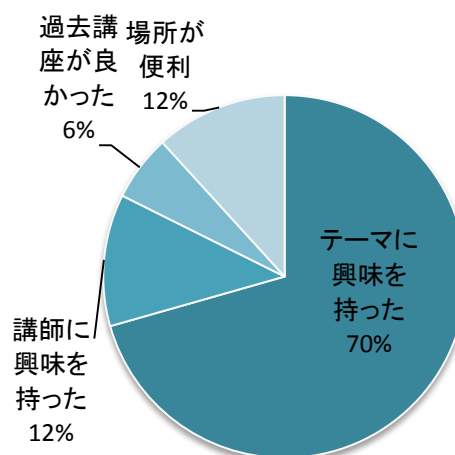
回収(枚)	回収率
13	100%

アンケート項目

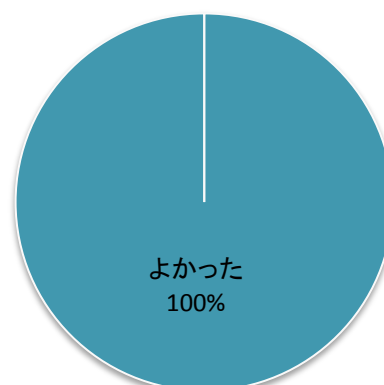
1.この講座を何で知りましたか(複数回答)	
広報ふくやま	9
本学のホームページ	1
友人, 知人	1
公共施設に配布してあるチラシ	1
その他	0



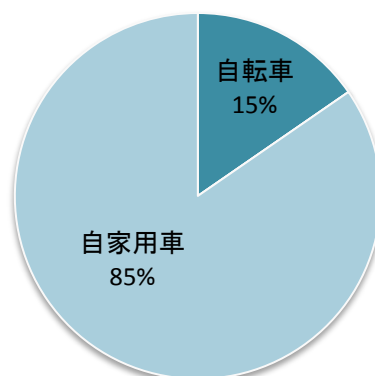
2.この講座になぜ参加しようと思われましたか(複数回答)	
テーマに興味を持ったから	12
講師に興味を持ったから	2
過去に受講した講座が良かったから	1
実施場所が便利だから	2
友人, 知人に勧められて	0
なんとなく	0
その他	0



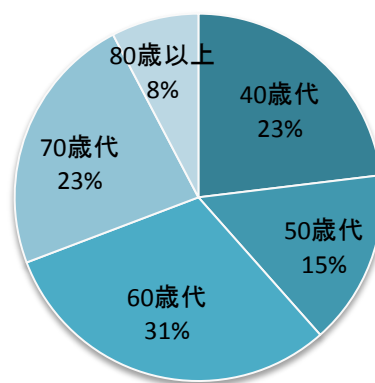
3.この講座を受けてどう思われましたか	
よかった	13
ややよかった	0
あまりよくなかった	0
よくなかった	0



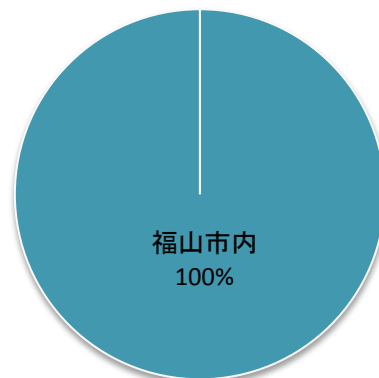
4.来学のおもな交通手段は何でしたか	
路線バス	0
自転車	2
徒歩	0
自家用車	11
タクシー	0
その他	0



5.年齢	
10歳代	0
20歳代	0
30歳代	0
40歳代	3
50歳代	2
60歳代	4
70歳代	3
80歳以上	1



6.お住まい	
福山市内	13
福山市外	0



福山市立大学高大連携事業

1 高大連携事業とは

高校生を対象に、大学が教育施設や教育研究機能・資源などを提供し、大学と高校が連携・協力して取り組む教育活動のこと。

※高校生が大学の公開授業や公開講座等に参加するものや、大学教員が高校に出向いて講義等を行うもののほか、高校と大学で協定を結んで独自のプログラムで取り組むものがある。

2 高大連携事業を実施することによる効果

「大学の知」を生かした連携プログラムを実施することで、大学への理解を深め、さまざまな学問領域への興味や関心を育てるとともに、高等学校の進路指導の充実や学習意欲の向上並びに次代の人材育成に貢献することができる。

3 高大連携事業の取組

次の「高大連携推進の基本方針」に基づき、福山市立大学教育研究交流センターの事業として、2017 年度（平成 29 年度）から実施する。

【高大連携推進の基本方針】

- 1 高校生の確かな学力を育成し、学習意欲の喚起とよりよい進路選択（学校選択）を可能にするため、高大連携事業を展開します。
- 2 高校生と大学生が交流する機会を提供し、双方のキャリア形成につながる活動を展開します。
- 3 地域全体の高等学校や高校生の活性化を目的とした地域貢献策としての高大連携事業を展開します。
- 4 高等学校と大学相互の教育活動の交流を通じて、各々の教育活動や立場の相互理解を深めるとともに、教育上の諸課題を共有し、これに適切に対応することで、双方の教育並びに研究等の充実及び発展につながる高大連携事業を展開します。

【取組実績等】

- (1) 2017 年度（平成 29 年度）実績
 - 福山市立福山高等学校
 - 岡山県立笠岡高等学校
- (2) 一般社団法人教育ネットワーク中国との連携
 - 公開講座の実施計画（2018 年度（平成 30 年度）から実施）

福山市立福山高等学校との連携事業

地元高校生が考える福山駅前再生計画！

趣旨・目的

福山市立大学と福山市立福山高等学校では、福山市役所や地元の皆様からの協力も得て、福山市の将来を担う高校生が、今後のまちづくりに必要な考え方やスキルを学び、高校生目線でまちづくり提案を行う機会を高大連携事業として立ち上げました。

福山市立福山高等学校2年生23人が5グループに分かれて、福山駅中エリア、駅前エリア、駅西エリア、駅東エリア、駅北エリアの5つのエリアについて、調査や研究に基づいた提案発表を行う形で実施しました。(振り返りの講義を含め、全10回の事業を実施)

※なお、本事業は、地域課題解決を目的とした公共データ活用プログラム「アーバンデータチャレンジ(UDC)」の取り組みでもあります。

担当教員：太田 尚孝(本学都市経営学部 非常勤講師)

[第1回] 2017年(平成29年)5月26日(金) 17:00～18:00 場所：福山市立福山高等学校

出前講座(テーマ：都市計画・まちづくりに必要な「目」)

[第2回] 2017年(平成29年)6月9日(金) 17:00～18:00 場所：福山市立福山高等学校

出前講座(テーマ：大学での学びとは？ まちづくりデザインゲーム)



[第3回] 2017年(平成29年)7月14日(金) 16:30～18:00 場所：福山市立大学

大学キャンパスツアー(テーマ RESAS/WEB GISの演習)



[第4回] 2017年(平成29年)7月28日(金) 場所: 福山駅前周辺, 福山市生涯学習プラザ
まち歩き, 福山市立大学生とのまちづくりワークショップ



(第4回の内容)

- ・福山駅前再生推進室の職員の方から, 福山駅前再生計画に関するミニ講義と質疑応答
- ・5グループによるワークショップ

対象地区の長所・短所について付箋を用いたブレインストーミングする方法など, 本学の大学生が協力してワークショップを進める。

最後は, ワークショップの成果発表としてグループ単位で対象地区の発表を行う。

[第5回] 2017年(平成29年)8月3日(木)・4日(金) 場所: 福山市生涯学習プラザ
ミニ講義, 福山市立大学生とのまちづくりワークショップ, 中間発表



(第5回の内容)

2日間をかけ, 対象エリアに対するコンセプトづくりと具体的なプロジェクトの提案を検討

- ・ミニ講義

エルファディンク・ズザンネさん(早稲田大学工学博士)による「自動車, 自転車, 歩行者: ドイツの街が変わる」と高校生との質疑応答

※グローバルで物事を考え, ローカルで活動することの重要性についてのアドバイス

- ・グループワーク

大学生のアドバイスを受けながら, 調査(まち歩きや情報収集, 街頭インタビュー, 関係機関へのヒアリング調査, GIS・RESASを活用した調査など

【中間発表会】

各グループがそれぞれのテーマ、対象エリアの長所や短所、課題解決策などを発表



[第6回] 2017年（平成29年）9月～10月 場所：福山市立福山高等学校

提案に関するブラッシュアップ（8月の中間発表時の課題解決）

[第7回] 2017年（平成29年）10月13日（金） 場所：福山市立福山高等学校

福山市立大学生とのワークショップ（最終発表に向けた作戦会議）

[第8回] 2017年（平成29年）10月30日（月） 場所：福山市立大学

最終発表リハーサル（最終発表は福山市立大学祭「港輝祭」で開催）

[第9回] 2017年（平成29年）11月11日（土） 場所：福山市立大学

大学祭で最終発表会（全員投票による審査）

発表内容の各グループの主な内容は、駅中エリア「駅改札で琴の音を流して街への期待度アップ」、駅前エリア「地下道を明るくして、フリーマーケットなどを開催」、駅西エリア「買い物客の休憩場所の整備」、駅東エリア「伏見町の商業地区のアーケードをカラフルな傘で飾り、SNSで魅力発信」、駅北エリア「駅北側の自転車周遊の利便性向上」を提案。

高校生からは、「自分たちにも福山を変えるチャンスがあると気づいた。」との所感が寄せられ、高大連携事業を通じた、学びから気づきとなり、将来の夢と行動への意欲につながりました。



[第 10 回] 2017 年（平成 29 年）11 月 24 日（金） 場所：福山市立福山高等学校

事業の振り返りと次のステップにつなげる講座

「地元高校生が考える駅前再生計画！」をテーマに、今年度 5 月から事業を開始して、高校への出前講座や大学生とのワークショップ、大学内での講義（G I S 演習）、まち歩き体験、高校生の主体的な調査・研究による提案報告など、10 回の事業を実施してきました。

事業を振り返りとして 2 つの「次のステップ」

- 1, 今後の高大連携事業に向けて、反省点や改善点を自ら考え次年度の後輩たちにつなげていくこと。
- 2, 各自が将来に向けた次のステップとして、今回の経験を振り返りながら、どのように今後に生かしていくか今回の振り返りの講義を通じて、高校生に確認を行い、高校生はそれぞれが事業レポートの作成を通じて、振り返りながら次のステップに向かいます。
- 3, 大学生のサポート

この事業に 8 人の大学生がサポート役として参加しましたが、この日の最終講座に参加した 2 人から高校生へのアドバイスや、この日は参加できなかった 6 人も事前にメッセージを作成し、ともに取り組んできた高校生への激励を行いました。

今年度の福山市立福山高等学校との「高大連携事業」は今回が最後の講義でしたが、事業に参加した高校生は校内行事や、次の学年への事業説明会など発表の機会があります。

すでに 1 グループが校内での研修会で発表を行っており、引き続き取り組んだことを思い起こしながら将来に向けて次の挑戦が始まります。

多くの高校生から「自分たちのまちを知り考える機会となった。」との感想が寄せられたことから、高大連携事業がめざした「高校生に大学への理解を深め、さまざまな学問領域への興味や関心を育てること」「学習意欲の向上」の目的を果たせたと思います。



岡山県立笠岡高等学校との連携事業

総合的な学習の時間 A C T（地域探究活動）

岡山県立笠岡高等学校では、2017 年度（平成 29 年度）から、総合学習の時間を「地域学」として、生徒の社会参画力を身につけることを目的として、岡山県立笠岡高等学校の取り組みに福山市立大学、笠岡市が連携して、1 年生 200 人を対象に実施しました。

福山市立大学は、大学教員による出前講座や大学生とのワークショップを高大連携事業として事業のサポートを行いました。

[第 1 回] 2017 年（平成 29 年）10 月 26 日（木） 場所：岡山県立笠岡高等学校

本学都市経営学部・渡邊 一成 教授による出前講座「プレゼンテーション（ポスターセッション）」講習を実施し、高校生に「地域学」の取り組みのあり方について示しました。

[第 2 回] 2017 年（平成 29 年）11 月 16 日（木） 場所：岡山県立笠岡高等学校

本学都市経営学部・渡邊 一成 教授、同 玉井 由樹 准教授と都市経営学部 4 年生の 25 人が、K J 法演習・グループワークを行いました。

高校生 200 人を笠岡の「ゴミ問題」「防災」「文化財」「地域活性化」「財政」「都市計画」「農業」「医療費削減」の 8 テーマでクラス分けし、各クラス 4 班が課題解決に向けたグループワークを行いました。その際には大学生が各クラスに 3～4 人位置づいて、各班でのグループワークをサポートしました。

今回の 8 つのテーマは、高校が笠岡市と意見交換を行う中で確定しました。本学で「都市経営学」を学ぶ大学生は、環境問題、都市計画、都市経営、文化・観光振興、経営・経済といった多様なテーマへの対応が可能で、グループワークでは高校生の主体的な取り組みを促す役割を担いました。



第3回 2018年（平成30年）1月12日（金） 場所：岡山県立笠岡高等学校
高校生による事業の取り組み発表に向けた講義・アドバイス

第4回 2018年（平成30年）3月20日（火） 場所：岡山県立笠岡高等学校
高校生による事業の取り組み発表における講評・アドバイス
担当教員：渡邊 一成（本学都市経営学部 教授）



福山市における高大連携活動「地元高校生が考える福山駅前再生計画」の試みと課題

○太田尚孝*・渡邊一成**

1. はじめに

(1) 高大連携活動への期待と現実

近年、全国的に高大連携活動が盛んに行われている⁽¹⁾。この背景には、大学側では、大学の存在意義の一つでもある地域貢献や、大学全入時代において目的意識を持ったより優秀な入学者の確保のため、高校側では問題解決型人材の育成や進路決定の一助、といった双方のニーズがあると考えられる。

特に都市計画やまちづくり分野では、そもそも「場」という具体性があり、高校生でも理解しやすいため、高大連携活動は取り組みやすく、既に多くの実践が行われ、活動報告⁽¹⁾も存在する。

しかし、たとえ高大連携活動の意義は総論賛成であったとしても、大学・高校側の準備や人材・資金の負担の問題、実社会と乖離した実現性の乏しい提案に終始する危険性、実施期間や実施内容の適切さ、など様々な困難に直面していると考えられる。

(2) 本報告の目的・構成・位置づけ

そこで、本報告は、上記の課題を理解した上で2017年5月から11月に実施した福山市立大学と福山市立福山高等学校（以下、福山高校）との高大連携活動の試みと課題を具体的に示し、今後の持続的で実りある活動実施の一助とすることを目的とする。

第二章では、実施した高大連携活動の概要（経緯・体制・特徴等）を整理する。第三章では、参加高校生へのアンケート調査と参加大学生へのヒアリング調査の結果と考察をまとめる。第四章では、本報告のまとめとして今回の活動の成果と課題を述べた後、今後の高大連携活動の展望を論じる。

なお、都市計画・まちづくり分野での高大連携活動といっても実施規模や実施段階に応じた事例の類型化が必要である。本報告に関しては、「地方小規模公立大学の高大連携事業立ち上げ時から初年度の実施報告」という理解が求められる。

2. 高大連携活動「地元高校生が考える福山駅前再生計画」の実施概要

(1) 実施検討の経緯

今回の高大連携活動は、著者の一人が東日本大震災後のいわき市での高校生との震災復興まちづくりワークショップに参加したことから始まる⁽²⁾。そこでの地元高校生に対する長期的まちづくり教育の必要性や、大学生・大学院生からのまちづくり提案に対する技術的指導の有用性、高校生と大学生との交流による進路決定への間接的促し等を経験し、福山市でも類似の活動ができないかと考えていた。

一方、福山市立大学では2015年春に初めて卒業生を送り出し、より具体的な地元貢献のあり方を模索していた。長年、広島県や福山市の高等学校教育に携わる専門家の助言も受け、2016年秋から学内での高大連携活動の実施にむけた議論が始まった。

連携先は、「市立大学」という大学設置の目的や高校からの進学実績、高校側でのニーズや受け入れ可能性等を検討した結果、福山高校となった。2016年12月及び2017年4月に高校側との打ち合わせを行い、目的の共有化、大まかなスケジュール調整、実施規模や参加人数等の確認を行った。

この中で、高校生も普段利用しており、かつ福山市民からも注目度が高い福山駅周辺の再生計画を高校生目線で提案することを目的とすること、他方で初年度の実験的段階では高校生の提案と市の再生計画を直接的に関連づけないことが決まった。同時に、後述の活動の特徴につながる細部も検討が進んだ。

(2) 実施体制の検討

大学と高校との議論の中では、属人的に活動を行うことは継続性や責任、予算措置、対外的な調整という面でも好ましくなくとなり、福山市立大学側の地域連携担当者が大学、高校、行政間でのマネジメントを担うことになった（図-1）。

*正会員 兵庫県立大学環境人間学部 准教授 (nota@shse.u-hyogo.ac.jp)

**正会員 福山市立大学教育研究交流センター長、都市経営学部 教授 (kz-watanabe@fcu.ac.jp)

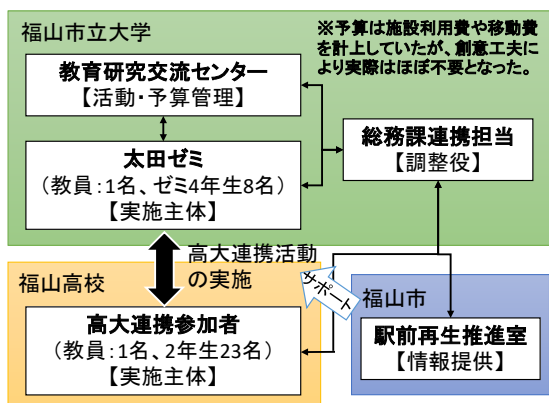


図-1 高大連携活動の実施体制

高校側での参加者は、半年間のプログラムに参加できることのみを条件として、進路決定への一助も考慮し、2年生から20名の参加者を募った。参加者数の上限は大学側からは筆者のゼミの4年生（8名）の協力を前提にし、グループワークでは各班高校生が4名、大学生2名の計6名程度が適切と考えたこともあり、この数となった。最終的には、高校側の参加者は高校2年生、23名（男性：12名、女性：11名）及び教員1名であった。

なお、今回の高大連携活動は「総合的な学習の時間」の選択プログラムの一つとして設定され、参加者同士は事前に面識がないこともあった。

(3) 活動の特徴

活動の特徴としては、以下の4点があげられる。

第一に、半年間の長期的プログラムとしたことである。その理由は、筆者のいわき市での経験から、1回限りの活動では参加生徒にとって有益な提案ができないと考えたからであった。具体的には5月末から11月末までの半年間、計9回の活動を行った（表-1）（図-2）。なお、長期的活動でもメリハリをつけるため、また日程調整のしやすさという意味で、夏休み期間中の3日間を使って集中的な活動を行った。

第二に、段階的な教育プログラムとしたことである。これは地元の高校生であっても、対象とするエリア（図-3）や提案のための十分な知識やスキルがないことが予想され、かつ前述のように高校生同士も今回の活動を通して知り合うことも考慮したからであった。最初の3回は都市計画やまちづくりの潮流の理解のための講義やカードゲーム等も交えたチーム形成の時間とした。次いで、夏休み期間中に参加者全員で福山市職員の同行による対象エリア全体のまち歩きを実施し、KJ法による各班の個別エリアの

課題や可能性の整理を行うとともに、中間発表会を行った。9月から10月のブラッシュアップ期間及びプレゼン練習を経て福山市立大学大学祭の一企画としても位置付けた最終発表会では、大学・高校・市役所からの審査員も招き、約60名の参加者全員による投票形式で最優秀賞⁽²⁾を選定した。最後に半年間の活動のまとめと評価も実施した。

表-1 活動スケジュールと主な実施内容

	日時	会場	実施内容	位置づけ
1	5/26（金） 17:00～18:00	福山高校	・ 出前講座 ・ グループ顔合わせ	・ チーム形成 ・ 提案に必要な考え方の理解
2	6/9（金） 17:00～18:00	福山高校	・ 大学生との交流 ・ まちづくりゲーム	・ スキルの習得
3	7/14（金） 16:30～18:00	市立大学	・ 大学見学 ・ RESAS/WEB-GIS学習	
4	7/28（金） 9:00～16:00	福山駅前、ローズコム	・ まちあるき ・ ワークショップ	・ 現地調査 ・ アイデアの間とりまとめ
5	8/3（木）～4（金） 9:00～16:00	福山駅前、ローズコム	・ ワークショップ ・ 中間発表会	・ 進捗確認
6	10/13（金） 17:00～18:00	福山高校	・ 進捗確認	・ 提案のブラッシュアップ
7	10/30（月） 16:30～18:00	市立大学	・ プレゼン練習	・ 追加調査
8	11/11（土） 14:00～15:00	市立大学	・ 最終発表会（参加者全員の投票あり）	・ 成果報告会
9	11/24（金） 17:00～18:00	福山高校	・ 振り返り講義 ・ 評価アンケート調査	・ 活動のまとめ ・ 評価

註：ローズコム＝駅近くに立地する福山市生涯学習プラザ



図-2 高大連携活動の様相



エリア	概ねの範囲
駅北	福山駅北口・福山城公園一带
駅中	福山駅構内・サンステ・ガード下一帯
駅西	キャスパ・リム一带
駅前	交通広場・地下道一带
駅東	伏見町一带

図-3 高大連携活動の検討エリア

第三に、提案の根拠としてデータを活用することを重視したことである⁽³⁾。ここで言うデータは、RESASやアンケート調査に代表される客観的な統計データだけではなく、フィールドワークやヒアリング調査に基づく質的データや他都市の事例も含まれる。いずれにしても高校生のアイデアを単なる思い付きの理想論ではなく、より現実性を持たすことを基本原則とした。なお、各班は活動スケジュールに記した以外の時間でも、提案の実現可能性を検証するためにデータの再整理や現地調査、ヒアリング調査、アンケート調査などを自主的に行った。

第四に、高校生と大学生との交流、大学生からの技術的指導に基づく活動としたことである。これは、高大連携活動はどちらかが一方的に関与することではなく、双方にとってWin-Winがなければ継続化は困難であると考えたこと、かつ大学生にとっても自身が大学時代に学んだことを高校生に教えることで今一度見つめ直す機会としたかったからであった。第2回から第7回に至るまで、大学生が主体的に企画運営をし、高校生のアイデアを引き出しながら、最終発表会に向けたプレゼン練習をリードした。

3. 参加高校生と参加大学生からの評価

(1) 参加高校生に対するアンケート調査の概要

アンケート調査は、参加高校生からの一連の活動に対する評価を把握し、今後の活動にフィードバックすることを目的として行った。調査実施日時は、2017年11月24日（金）の最終回終了後であり、当日出席した19名から全員回答を得た。

調査項目は、二部構成として第一部では高大連携事業の内容や進め方について7つの設問を用意し5段階評価を行った。第二部は、自由記述欄として、高大連携事業に参加して良かった点、改善すべき点を設定した。

(2) 参加高校生へのアンケート調査の結果と考察

半年間という実施期間（Q1）及び半年間の実施頻度（Q2）については、判断が難しい結果となった（図-4）。これは同様に自由記述欄でも肯定的・否定的な意見がみられた。大学と高校では学年歴が当然異なるため、事務的にも参加者自身も日程調整が最も煩雑な作業である。一つの解決策として、高校側で通常授業としての位置づけを与えることで確実に時間数を確保することがありうるが、大学側がこれに合致するスケジュールを組めない可能性も高い。また、夏季休暇中での1週間程度の短期集中型もありうるが、それが今回の試みよりもより充実した内容につながるかは不透明でもある。

実施内容のレベル（Q3）には概ね問題なかったと判断できる。一方で、自由記述欄の内容や今回の高大連携活動の特徴を踏まえると、データ整理のためのスキル系の学習時間を増やすことは今後、より必要になると考えられる。

サポートした大学生の存在（Q4）については、グループを担当した学生のサポート内容、持っているスキル、接し方等に大きく左右された結果であると理解できる。今回の高大連携活動は、高校生への教育を重視した内容となっていたため、大学生への教育は疎かになっていた点は否めない。グループワークの仕方や、データ処理方法など、参加する大学生への事前教育は今後の大きな課題といえる。

活動を通した福山への関心（Q5）は、提案対象を福山駅としたこともあり、福山への関心が高まったのはある意味当然の結果と判断できる。それでもなお、今回の取り組みが福山の再評価となったことは、自由記述の「良かった点」にて11/19名がその旨を記述していたことから一つの成果といえる。

進路決定への影響（Q6）は、設問自体の精度や自由記述内容からも就職や大学名に関する具体的な進路決定に影響を与えたとは判断できない。なお、自由記述欄からは自分たちでもまちの活性化に寄与する可能性があることや、都市計画やまちづくり分野への関心が高まるきっかけになったことは読み取れた。

総合的な評価（Q7）としては、概ね参加してよかったと評価されたといえる。自由記述欄では高校では学習機会や実践が乏しい、論理的なプレゼン技

術の習得ができたことを良かった点としてあげている生徒も6/19名と多かった。

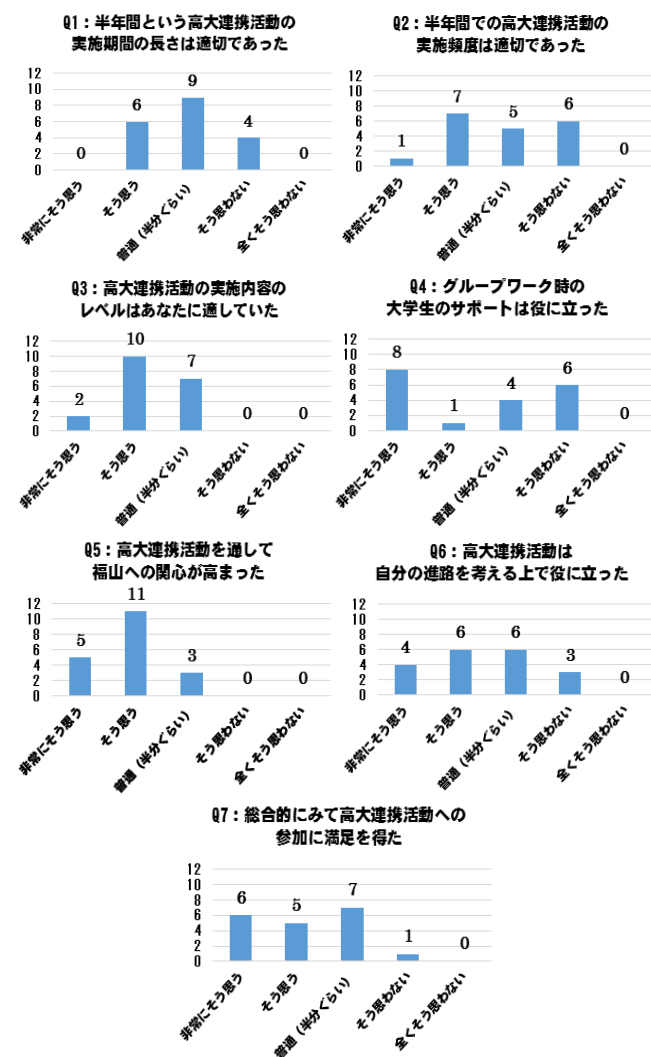


図-4 アンケート調査結果 (Q1~Q7)

(3) 参加大学生からの声

大学生には、中間発表後に意見収集を行った。この際に大学生からは、ゼミ活動の一環として活動の社会的意義は理解できるとしても、活動に参加するためのインセンティブの低さが問題視された。本来的には大学生自身も教えることで学んでおり、彼ら・彼女らに対する教育的観点からは、「対価」を考えること自体が不適切ともいえる。

しかし、円滑かつ継続的な活動のために、授業外の課外活動の一つとして単位認定をすることや、ティーチングアシスタントのような形で雇用することも今後検討する必要があるといえる。同時に、大学生側の参加者も今回のようにゼミ単位ではなく、公募形式とし、各人の能力が活かせるより主体的な関りを促す仕組みも必要といえる。

4. おわりに

(1) 高大連携活動の初年度の成果と課題

福山市立大学にとっては本活動のような「長期的」「段階的」「エビデンス重視」「大学生主導」という特徴を持つ都市計画・まちづくり分野での高大連携活動は初の試みであった。その意味で、プロトタイプがつくれ、実践できたことは一つの成果といえる。また、一連の活動への社会的注目度も高く⁽⁴⁾、今後の展開も期待されているといえる。

しかし、実施期間や実施内容、大学生への教育の必要性といったことや、参加大学生のモチベーションへの配慮など考えるべき点は多い。また、根拠に基づく提案を行ったとしても、いかにして実現化に近づけていくかが重要な点になるといえる。

(2) 持続的でより実りのある高大連携活動に向けて

継続的に活動を進めるためには、外部との調整役がいたとしても、大学・高校の担当教員への負担軽減を考えていく必要もある。例えば、福山市立大学をはじめとして大学生のまちづくり団体が組織化されており³⁾、協働することも一つのあり方といえる。また、実現化にむけてはクラウドファンディングのような手法も考えられる。同時に、全国での取り組み実践の意見交換の場も必要である。

しかし何よりも、次世代の都市計画やまちづくりを担う高校生をはじめとする若者に、実社会や大学と関わりながら自分たちが暮らす空間を見つめ直す機会を与えることに理解を示し、厳しくも温かいエールを送り続ける姿勢が重要といえる。

【謝辞】

今回の高大連携活動のきっかけを与えていただいた広島県教育委員会の山口哲治先生、連携先の福山高校の向井勝也校長先生、川高佐知子先生にあらためて感謝申し上げます。また、福山市駅前再生推進室の皆様にも御礼申し上げます。

【補注】

- 例えば、高大連携活動を積極的に推進している筑波大学の高大連携データベース (<http://koudai.tsukuba.ac.jp/>) をみても、2005年度の120件程度が2014年度は500件と増加している。
- 最優秀賞には、駅東チームの「懐かしさと新しさの息づく街」が選ばれた。
- これに関連して、本活動は、「アーバンデータチャレンジ」の取り組みとしても位置づけられた。
- 本活動に関して、3社から計7回の新聞記事掲載があった。

【参考・引用文献】

- 尾上夏菜ほか(2016)「高知県の町における地域活性化のための高大連携「仁淀ブループロジェクト」」『地域活性学会研究大会論文集』, 8, 152-155
- 盆子原歩ほか(2014)「高校生による復興まちづくり」『オペレーションズ・リサーチ』, 59(6), 324-329
- 岡辺重雄ほか(2016)「FCU-Chan研究会(2015年度)による学生まちづくり活動の成果と活動意義に関する考察」『都市経営』, 9, 65-75

■2017年度(平成29年度)活動記録

2017年(平成29年)

- | | | |
|-----|-----------|--|
| 4月 | 26日(水) | 第1回教育研究交流センター運営委員会 |
| 5月 | 13日(土) | 特別企画「びんご圏域6大学の人気講座紹介!! 第2弾」 |
| | 19日(金) | 国際交流「格差社会における中国の“流動児童”の教育現状と課題 ― 北京の例を中心に ―」 |
| | 31日(水) | 第2回教育研究交流センター運営委員会 |
| 6月 | 17日(土) | 公開講座 知の深化①「女性と政治:女性の参加で政治は変わる」 |
| | 28日(水) | 第3回教育研究交流センター運営委員会 |
| 7月 | 15日(土) | 公開講座 知の深化②「『赤ずきん』を読んで、文学の森で〈迷子〉になろう!!」 |
| | 26日(水) | 第4回教育研究交流センター運営委員会 |
| | 29日(土) | ワークショップ「ふくやまの伝統芸能「二上りおどり」 |
| 8月 | 5日(土) | 公開講座 知の深化③「広島豪雨災害を踏まえた防災対応と福山市への知見」 |
| | 6日(日) | ワークショップ「まちをつくろうワークショップ ～ 広場の模型を作る ～」 |
| 9月 | 7日(木) | ワークショップ「日本の伝統文化「こぎん刺繍」の理解と技術の伝承」(～9月28日) |
| | 25日(月) | 第5回教育研究交流センター運営委員会 |
| | 30日(土) | 2017ふくやまサイエンスフェスティバル |
| 10月 | 7日(土) | ワークショップ「ヨガ」① |
| | | 公開講座 知の深化④「ブランドから組立てる地域戦略 ― 消滅可能性都市とされた田舎町の挑戦 ―」 |
| | 21日(土) | ワークショップ「ヨガ」② |
| | | 公開講座 知の深化⑤「心と体の健康」 |
| | 23日(月) | 第6回教育研究交流センター運営委員会 |
| 11月 | 2日(木) | 特別講演会「アラスカの大自然で学ぶ」 |
| | 3日(金) | ワークショップ「中国の食文化体験 ― 水餃子作り」 |
| | 4・5日(土・日) | 国語教育学会 |
| | 18日(土) | 公開講座 知の深化⑥「古代の海民と北海道」 |
| | 29日(水) | 第7回教育研究交流センター運営委員会 |
| 12月 | 16日(土) | 公開講座 知の深化⑦「冬の夜空の物語」 |

2018年(平成30年)

- | | | |
|----|--------|--------------------|
| 1月 | 24日(水) | 第8回教育研究交流センター運営委員会 |
| 2月 | 22日(木) | 第9回教育研究交流センター運営委員会 |

参 考 資 料

■福山市立大学教育研究交流センターの概要

1. 目的

教育研究交流センターでは、全学の協力のもと、大学が有する知的資源を活用し、地域交流及び生涯学習等に関する調査・研究並びに教育事業を行うとともに、地域連携及び国際交流等に関する取組を推進し、本学の教育研究並びに地域社会の発展に寄与します。

2. 業務内容

教育研究交流センターは、公開講座などの学外向け事業の企画・立案を行うとともに、地域課題と研究内容を結び付ける窓口として、各種の相談業務を行います。

1) 地域交流事業

大学施設の一般公開事業など、地域に広く門戸を開放し、地域に親しまれ信頼される大学をめざします。

さらに、都市型キャンパスの好立地を生かし、様々な社会の担い手が集い、語り、共に学ぶ環境づくりを進めます。

2) 公開講座、連携事業、ワークショップ

地域に関わる関心や興味深いテーマを様々な側面から取り上げる講演会を開催します。また、少人数で参加型のワークショップを開講します。

「びんご圏域」の大学等の連携を基盤に、地域の抱える問題の解決や、アウトリーチ活動をより発展させるため、圏域内の連携を図ります。

3) 受託研究・共同研究事業

大学教員や研究者のノウハウや蓄積を社会に還元していくため、地域のシンクタンクとしての機能の充実をめざします。

地域や産業界、行政などのニーズ(課題)の情報収集・分析を行うとともに、本学の研究機能とをマッチングさせる窓口になります。

4) 国際交流事業

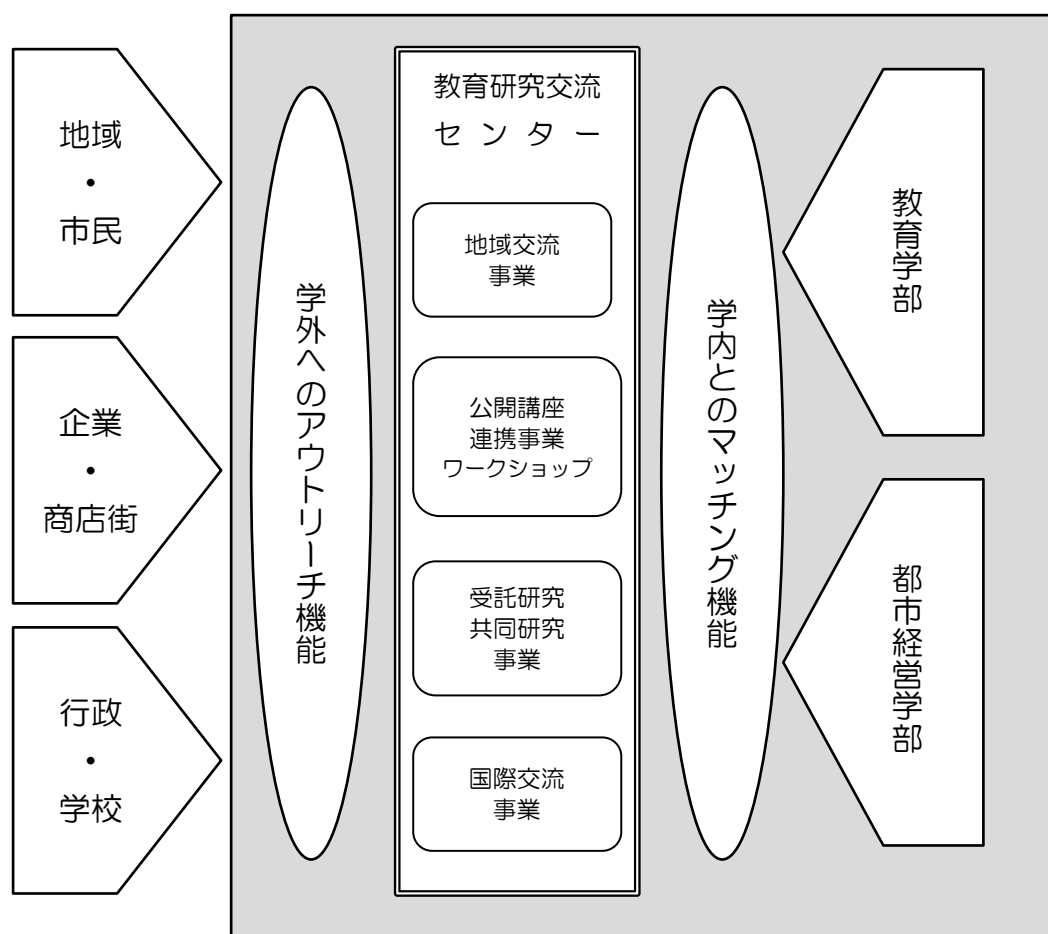
海外の教育機関との連携交流を推進し、学術の向上と地域貢献に寄与します。

3. 所在地

福山市港町二丁目 19 番 1 号

福山市立大学内 管理棟 1 階

4. 概念図



福山市立大学教育研究交流センター規程

平成23年4月1日

福山市立大学規程第66号

改正 平成26年2月17日規程第5号

改正 平成27年2月17日規程第25号

改正 平成28年2月19日規程第2号

(設置)

第1条 この規程は、福山市立大学学則（平成23年規則第1号）第4条第1項第2号の規定に基づき、福山市立大学教育研究交流センター（以下「センター」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定めるものとする。

(目的)

第2条 センターは、全学の協力のもと、福山市立大学（以下「本学」という。）が有する知的資源を活用し、地域交流及び生涯学習等に関する調査・研究並びに教育事業を行うとともに、地域連携及び国際交流等に関する取組みを推進し、もって本学の教育研究並びに地域社会の発展に寄与することを目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の業務を行うものとする。

- (1) 地域交流に関する事項
- (2) 公開講座等の生涯学習事業に関する事項
- (3) 受託研究及び共同研究に関する事項
- (4) 国際交流に関する事項
- (5) その他センターの目的を達成するために必要な事項

(組織)

第4条 センターにセンター長その他必要な職員を置く。

- 2 センター長は、センターの業務を統括するものとし、本学の専任教員のうちから、学長が指名する。
- 3 センター長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営委員会)

第5条 センターに運営委員会を置き、次に掲げる事項を審議する。

- (1) センターの業務に関する重要事項
- (2) センターの管理運営に関する事項
- (3) その他センターに関する重要事項

第6条 運営委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) センター長
- (2) 教育学部教員 2人
- (3) 都市経営学部教員 2人
- (4) 総務課職員 1人

(委員長等)

第7条 運営委員会に委員長及び副委員長を置く。

2 委員長は、センター長をもって充てる。

3 委員長は、運営委員会を招集し、その議長となる。

4 副委員長は、委員長が指名する。

5 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

6 運営委員会は、委員総数の半数以上の委員が出席しなければ、会議を開くことができない。

7 議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第8条 委員長が必要と認めるときは、委員会の会議に委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。

(事務)

第9条 センターの事務は、事務局総務課において処理する。

(委任)

第10条 この規程に定めるもののほか、センターの運営に関して必要な事項は、センター長が定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成27年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成28年4月1日から施行する。

福山市立大学教育研究交流センター 年報

vol.7 2017

発行日	2018 年(平成 30 年)3 月 30 日
発行・編集	福山市立大学教育研究交流センター 〒721-0964 広島県福山市港町二丁目 19 番 1 号 TEL(084)999-1115 FAX(084)928-1248 E-Mail:koryu@fcu.ac.jp URL: http://www.fcu.ac.jp/
印刷所	ふじ印刷(株) 〒721-0974 広島県福山市東深津町 2 丁目 16-32 TEL(084)925-2050 FAX(084)925-4165



FUKUYAMA
CITY
UNIVERSITY